

# 多賀城市内の遺跡 2

—平成16年度発掘調査報告書—

平成17年3月

多賀城市教育委員会



多賀城市文化財調査報告書第78集

# 多賀城市内の遺跡 2

—平成16年度発掘調査報告書—

平成17年3月

多賀城市教育委員会



## 例　　言

1. 本書は、平成16年度の国庫補助事業で実施した10件の調査成果をまとめたものである。
2. 遺構の名称は、各遺跡とも第1次調査からの連続番号である。
3. 測量法の改正により、平成14年4月1日から経緯度の基準は、日本測地系に代わり世界測地系に従うこととなったが、本書では過去の調査区との整合性を図るため、従来の国土座標「平面直角座標系X」を用いている。なお、市川橋遺跡の調査区基準線については、X = -189,200.000、Y = 13,850.000（南北・東西大路交差点の中央付近）の交点を東西・南北の原点とし、1m離れるごとに東西方向はE 1・E 2・・・、W 1・W 2・・・、南北方向はN 1・N 2・・・、S 1・S 2・・・と表示している。
4. 掘図中の高さは標高値を示している。
5. 土色は『新版標準土色帖』（小山・竹原：1996）を参考にした。
6. 本書の作成にあたっては調査員全員で協議を行い、I を石川俊英、II・Vを相澤清利、IIIを鈴木孝行、IV・VII・VIII・Xを千葉孝弥、VIを村松稔、IXを武田健市が執筆した。編集は千葉が担当した。
7. 市川橋遺跡第46次調査出土遺物の付着物については東北芸術工科大学保存修復研究センター研究員手代木美恵氏に御教示を得た。
8. 市川橋遺跡第48次調査出土人骨の鑑定を東北大学医学部人体構造分野の百々幸雄、瀧川涉両氏に依頼し、その結果を附章1として掲載した。
9. 新田遺跡第29・30次調査のプラン・オパール分析を株式会社古環境研究所に委託し、その結果を附章2として掲載した。
10. 木製品の樹種については、東北大学理学研究科附属植物園大山幹成氏にご教示を得た。
11. 調査に関する諸記録および出土遺物はすべて多賀城市教育委員会が保管している。

## 凡　　例

1. 本書で使用した遺構の種類を示すアルファベット記号は次のとおりである。  
S B : 建物　　S A : 柱列　　S I : 竪穴住居　　S E : 井戸　　S D : 溝  
S K : 土壙　　S X : 道路・河川・その他の遺構
2. 奈良・平安時代の遺物の分類記号は『市川橋遺跡一城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書II』（多賀城市教育委員会 2004）に従った。
3. 瓦の分類は『多賀城跡 政庁跡 本文編』（宮城県教育委員会 宮城県多賀城跡調査研究所 1982）に従った。
4. 本文中の「灰白色火山灰」の年代については、伐採年代が907年とされた秋田県払田柵跡外郭線C期存続中に降下し、承平4年（934）閏正月15日に消失した陸奥国分寺七重塔焼失時の焼土層に覆われていることから、907～934年の間とする考え方と（宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1997』1998）、『扶桑略記』延喜15年（915）7月13日条にある「出羽国言上雨灰高ニ寸諸郷桑枯損之由」の記事に結びつけ、915年とする考え方がある（町田洋「火山灰とテフラ」『日本第四紀地図』1987、阿子島功・壇原徹「東北地方、10C頃の降下火山灰について」『中川久夫教授退官記念地質学論文集』1991）。当センターでは考古学的な見解を重視し、前者の年代観に従っている。

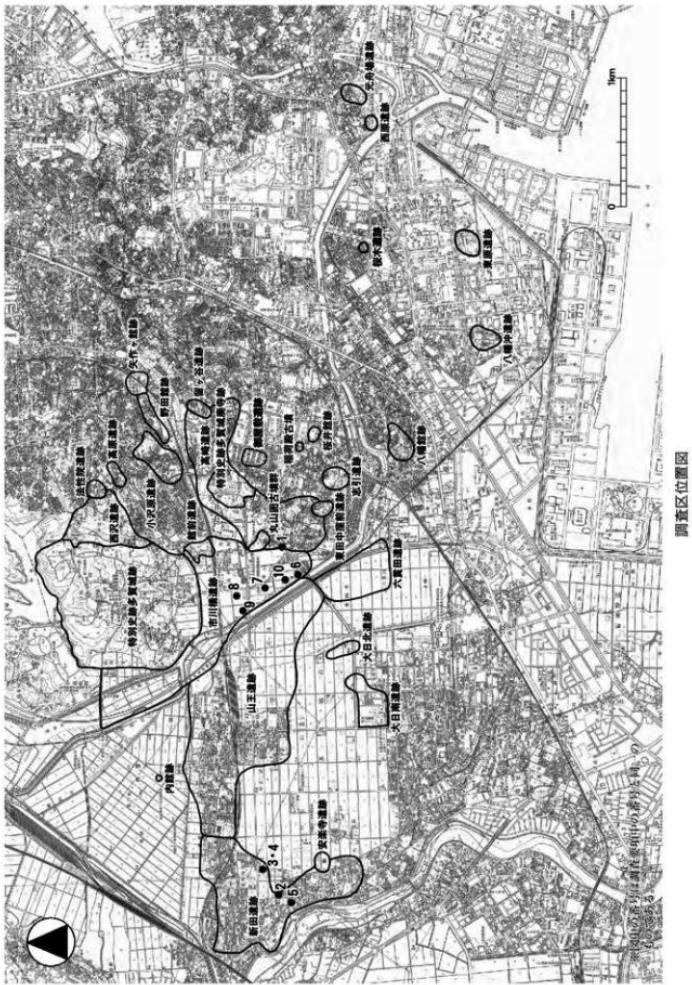
## 調査要項

1. 調査主体 多賀城市教育委員会 教育長 櫻井茂男（～平成16年9月）  
教育長 菊地昭吾（平成16年10月～）
2. 調査担当 多賀城市埋蔵文化財調査センター 所長 佐藤慶輝
3. 調査員 多賀城市埋蔵文化財調査センター 研究員 石川俊英 千葉孝弥 烏田 敏  
相澤清利 鈴木孝行 武田健市  
技師 村松 稔  
嘱託 相澤正信 廣瀬真理子 岩永知子  
大友貴晴
4. 調査協力者 相澤信二 伊藤信子 柿境 淳 熊谷和多利 倉本露樹 西城照彦 櫻井 潤  
瀬川朋幸 瀬川美智子 角田常治 角田英之 矢口 伸 山口宏明 渡辺雄幸  
多賀城市城南土地区画整理組合
5. 調査従事者 赤間かつ子 浅野喜久男 荒戸しづ子 遠藤一代 遠藤好巳 大場勝善 大山貞子  
岡本典子 小幡 武 小野玉乃 小野寺恵子 後藤恵子 小松まり 今野和子  
塙井一征 武山あや子 南城美岐子 藤澤拓司 藤田恵子 宮川ハルミ  
宮下喜代平 宮崎 忍 横山凱麗 渡辺ゆき子
6. 整理従事者 遠藤友美 中村千恵子 横山佳織 村上和恵 小川菜々子

No	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査員
1	高崎遺跡第44次	高崎二丁目99-2、99-5	平成16年4月8日～4月19日	21m <sup>2</sup>	石川・大友
2	新田遺跡第27次	新田字北164-2	平成16年4月8日～4月30日	40m <sup>2</sup>	相澤(清)・岩永・大友
3	新田遺跡第28次	新田字北29-1の一部、30-4	平成16年5月7日～5月25日	32m <sup>2</sup>	鈴木・廣瀬
4	新田遺跡第29次	新田字北31-3、31-4	平成16年8月17日～9月8日	61m <sup>2</sup>	千葉
5	新田遺跡第30次	新田字西2-9、2-13	平成16年10月7日～10月18日	53m <sup>2</sup>	相澤(清)
6	市川橋遺跡第44次	城南二丁目20-23	平成16年5月6日～5月13日	22.5m <sup>2</sup>	村松・相澤(正)
7	市川橋遺跡第46次	城南二丁目5-11	平成16年6月14日～6月30日	25m <sup>2</sup>	千葉・石川
8	市川橋遺跡第48次	城南一丁目10-34	平成16年7月20日～7月26日	103m <sup>2</sup>	千葉
9	市川橋遺跡第50次	城南一丁目5-16	平成16年9月13日～10月15日	44m <sup>2</sup>	武田・廣瀬・岩永・大友
10	市川橋遺跡第51次	城南二丁目17-32	平成16年10月12日～10月27日	21m <sup>2</sup>	千葉・岩永

## 目 次

例 言	
凡 例	
調査要項	
目 次	
I. 高崎遺跡第44次調査	1
II. 新田遺跡第27次調査	4
III. 新田遺跡第28次調査	13
IV. 新田遺跡第29次調査	17
V. 新田遺跡第30次調査	22
VI. 市川橋遺跡第44次調査	24
VII. 市川橋遺跡第46次調査	27
VIII. 市川橋遺跡第48次調査	40
IX. 市川橋遺跡第50次調査	42
X. 市川橋遺跡第51次調査	63
附章1 市川橋遺跡第48次調査出土の古代人骨	66
附章2 多賀城市新田遺跡第29・30次調査のプラント・オバール分析	70



# I. 高崎遺跡第44次調査

## 1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴って実施したものである。今回の建設工事は基礎工法に地下約2～5mまで鋼管を打ち込むパイロット工法を探っていることから、地下構造に影響を与えることが考えられた。そのため発掘調査の実施を前提とした協議を行い、平成16年3月22日に依頼を受けて本発掘調査に至ったものである。

調査は4月8日より開始し、はじめに重機によつて盛土除去作業を行い、終了後遺構検出作業に入り溝跡、土壤等を検出する。14日には平面図作成のため基準点を設定した。遺構は複重関係を確認後、埋土を掘り下げ、写真撮影及び平面図・断面図を作成した。16日は全景写真撮影を行つた。19日には埋め戻し作業を行い、発掘器材を撤収し全ての調査を終了した。

## 2. 調査成果

### (1) 層序

当該区は、丘陵の裾部に位置し、調査区内は東部から西部へ大きく傾斜している。比高は約80cmである。今回の調査よつて確認できた層序は以下のとおりである。

I層：現代の盛土で、厚さは0.2～1m。

II層：オリーブ褐色シルトで、調査区全域に認められる。厚さは8～20cm。

III層：褐色シルトで、調査区のほぼ全域に認められる。厚さは4～20cm。

IV層：褐色シルトで、調査区北東部から西半部に認められる。厚さは5～16cm。

V層：黄褐色シルトで、調査区北東部から西半部に認められる。厚さは10～23cm。

VI層：明黄褐色シルトで、調査区全域に認められる。

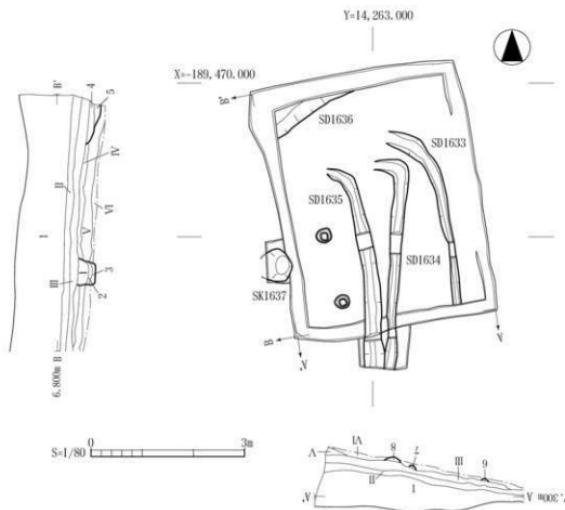
### (2) 発見遺構と遺物

#### SD1633溝跡

調査区東半部のVI層上面で発見した南北方向の溝跡である。溝の北端は西へ屈曲する。確認できた長さは約4.1mで、規模は幅12～36cm、深さ5cmである。方向は北で約9度東に偏している。断面形はU字状である。埋土は炭化物、明黄褐色土を含む褐色シルトである。遺物は土師器が出土している。



第1図 調査区位置図



第2図 遺構平面図・断面図

#### SD1634溝跡

調査区中央部のVI層上面で発見した南北方向の溝跡である。溝の北端は西へ屈曲する。SD1635と重複しそれより新しい。確認できた長さは約4.5mで、規模は幅17~33cm、深さ10~12cmである。方向は北で約3度東に偏している。断面形はU字状である。埋土は2層に区分される。上層は粘性、しまりのある褐色土、下層は明黄褐色土を含む黄褐色土である。遺物は出土していない。

#### SD1635溝跡

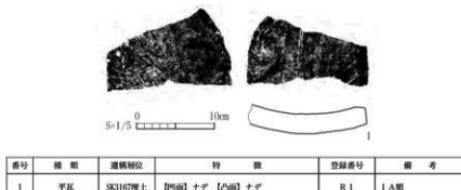
調査区西半部のVI層上面で発見した南北方向の溝跡である。溝の北端は西に屈曲する。SD1634と重複しそれより古い。確認できた長さは約4mで、規模は幅19~41cm、深さ8~11cmである。方向は北で約7度西に偏している。壁は底面より緩やかに立ち上がっている。埋土は炭化物を多く含む褐色土である。遺物は土師器杯・甌が出土している。

#### SD1636溝跡

調査区北西部のIV層上面で発見した。南辺の一部を約2.8m検出したのみで、全容は不明だが東西溝と見られる。深さは西壁で見ると20cmである。埋土は2層に区分される。上層はにぶい黄褐色土、下層は明黄褐色をわずかに含む褐色土である。遺物は出土していない。

### S K1637土壤

調査区西部のIV層上面で発見した土壤である。土壤の西側は調査区外に延びていく。確認できた規模は南北65cm、深さ35cmである。断面形は逆台形である。埋土は3層に区分される。I層は炭化物ブロックを多く含んだ褐色土、2・3層は炭化物ブロック、明黄褐色土をわずかに含んだ黄褐色土である。遺物は土師器杯・甕（A類）、平瓦（IA類 第3図1）、焼石が出土している。



第3図 SK1637土壤出土遺物

### 3.まとめ

今回の調査では、溝跡4条、土壤1基、柱穴2基を発見した。遺構の年代は、SD1633・1635からロクロ使用の土師器が出土しており、8世紀後葉以降と見られる。SK1637については、非ロクロ調整の土師器甕（A類）、平瓦（IA類）を含むことから、8世紀前葉以降としておきたい。その他の遺構については、出土遺物がないため、特定できない。



調査区全景 西より

## II. 新田遺跡第27次調査

### 1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴うものである。今回の開発計画は、基礎工事に支柱杭を地下8mまで打ち込むパイル工法をとることから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、地権者および施工業者と基礎工法の変更について協議を行ったが、申請された工法で実施することに決定した。これにより、平成16年4月1日付けで発掘調査の依頼を受けたことから本発掘調査として実施した。

調査は4月8日から開始し、はじめに重機を使用して造成時に伴う盛土（Ia層）・現代の畑耕作土層（Ib層）の除去を行う。9日からはⅢ層上面での遺構検出作業を開始する。調査区の北東側からは、焼土・岩片のまとまりが、南側ではピットの分布がみられた。13日に測量杭を設置し、平面図・断面図の作成を開始する。Ⅲ層上面では、焼土遺構・素掘りの井戸跡・掘立柱建物跡が発見され、出土遺物から中世頃の時期とみられた。これらの遺構を掘り下げながら同時に実測図の作成、写真撮影を行っていった。19日からは下層調査区を設定し、V層上面で2条の溝跡を発見した。このうち1条は造り替えがあり、規模が大きく屈曲することから、これまで周辺で発見されている中世の屋敷に伴う溝跡と推定された。26日には全景の写真撮影、器材の撤収を行った。この後、直ちに埋め戻しを行う予定であったが、悪天候が続き5月13日に埋め戻しを行い一切の調査を完了した。

### 2. 調査成果

#### (1) 層序

今回の調査区で確認された層序は以下のとおりである。

Ia層：宅地造成に伴う盛土層で、厚さは30～40cm。

Ib層：現代の畑耕作土層で、厚さは40cm前後。

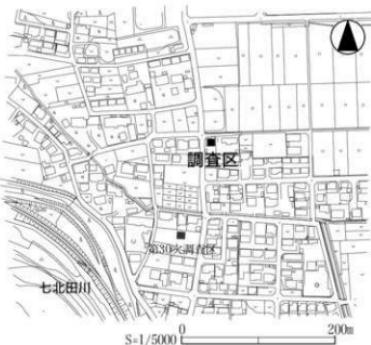
Ic層：現代以前の畑耕作土層で、厚さは10cm前後。

II層：オリーブ黒色シルトで、厚さは10～18cm。調査区北西隅に分布する。

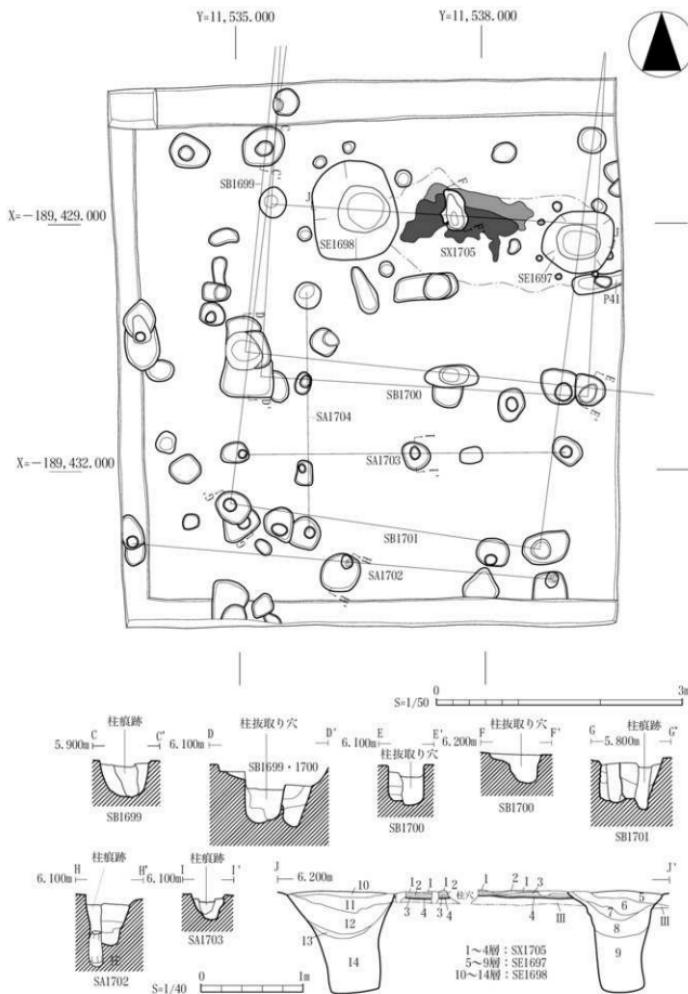
III層：黄灰色シルトで、厚さは10～20cm。中世の遺構検出面。

IV層：黄灰色シルトで、厚さは5～20cm

V層：黄灰色シルトで、厚さは15cm前後。調査区南西部に分布するVI層ブロックを含む整地層。



第1図 調査区位置図



第2図 III層上面検出構造平面図・断面図

中世の遺構検出面。

VI 層：にぶい黄色シルトで、厚さは20cm前後。中世の遺構検出面。

VII 層：灰色粘土で、厚さは15cm前後。

VIII 層：黒色粘土で、厚さは10cm前後。古墳時代の土層。

IX 層：灰色粘土で、厚さは5cm以上。

## (2) 発見遺構と遺物

### S B1699掘立柱建物跡

調査区北半のⅢ層上面で発見した東西1間以上、南北1間以上の掘立柱建物跡である。大部分が調査区外へと延びており3基の柱穴を確認したにすぎない。3基のうち1基に柱痕跡、2基で柱抜取り穴を検出した。S B1700・1701と重複し、それよりも新しい。方向は、西側柱列で見ると北で約8度東に偏している。柱間は東西約4.6m以上、南北2.8m以上である。柱穴の平面形は、一辺30～60cmの不整形で、深さは35～50cmを計る。掘り方理土は、にぶい黄色シルトのブロックを含む灰色シルト、柱抜取り穴埋土は、炭化物を含む灰色シルトである。柱痕跡は直径約20cmの円形である。遺物は出土していない。

### S B1700掘立柱建物跡

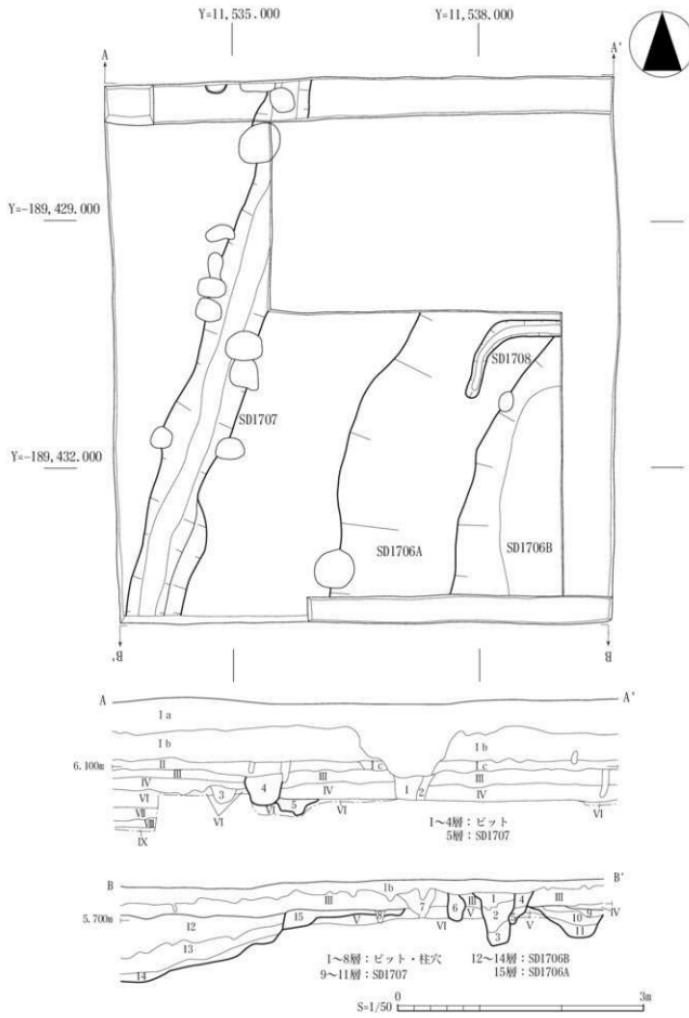
調査区北半のⅢ層上面で発見した東西2間、南北1間以上の南北棟掘立柱建物跡である。南から1間目の棟通下には間仕切りの柱穴がある。柱穴は5基検出し、すべての柱穴で柱抜取り穴を確認した。S B1699・1701、S E1697、S X1705と重複し、S B1699、S E1697より古くS B1701、S X1705より新しい。方向は、西側柱列で見ると北で約3度東に偏している。梁行柱間は南妻で総長約4m以上、柱間は西より2.3m・2.2m、桁行柱間は西妻で南より1間分が約2.1m以上である。柱穴の平面形は、直径40cmの円形と一辺60cmの不整形のものがある。深さは30～60cmを計る。掘り方理土は、黄灰色シルト、柱抜取り穴埋土は、炭化物を含む褐色シルトを主体とする。遺物は、柱抜取り穴埋土より施釉陶器小皿の口縁部破片（第4図8）と銭貨（至□□寶）（第4図9）の破片が出土している。

### S B1701掘立柱建物跡

調査区のほぼ全域、Ⅲ層上面で発見した桁行2間以上、梁行1間の南北棟掘立柱建物跡である。柱穴は6基検出し、1基に柱痕跡、3基で柱抜取り穴を確認した。S B1699・1700と重複し、それより古い。方向は、西側柱列で見ると北で約6度東に偏している。梁行は南妻で総長約3.8m、桁行は東側柱列で南より約1.9m、約3.1mである。柱穴の平面形は、直径30cmの円形と一辺40～50cmの不整形のものがある。深さは25～50cmを計る。掘り方理土は、黄灰色シルト、柱抜取り穴埋土は、炭化物を含む褐色シルトを主体とする。遺物は出土していない。

### S A1702柱跡

調査区南壁際のⅢ層上面で発見した東西方向に延びる2間の柱跡である。調査区の東、西、南に展開する掘立柱建物跡の可能性もある。重複関係はない。3基の柱穴のうち2基で柱材を、1基で柱痕跡を確認した。このうち1基の柱材は（第4図11）、直径約15cm、長さ34.5cmを計り、掘り方底面より約20cm沈み込んでいた（第2図）。方向は、東で約6度南に偏している。2間分で総長約5.1m、柱間は西より約2.6m、約2.5mである。柱穴の平面形は、直径約30cmの不整円形と一辺約40cmの開丸方形のものがある。深さは約50cmを計る。掘り方埋土は、暗灰黄色シルト、柱痕跡埋土は、暗灰色シルトを主体とする。遺物は出



第3図 V層上面検出遺構平面図・断面図

土していない。

#### S A1703柱列跡

調査区南半のⅢ層上面で発見した東西方に延びる2間の柱列跡である。調査区の東、西、南に展開する掘立柱建物跡の可能性もある。S B1701、S A1704と重複関係にあるが、直接の切り合いがないため新旧関係は不明である。すべての柱穴で柱痕跡を確認した。方向は、ほぼ発掘基準線に一致する。2間分で総長約3.9m、柱間は西より約2.1m、約1.8mである。柱穴の平面形は、不整形で一辺20～40cm、深さは約30～40cmを計る。掘り方理土は、炭化物を含む灰色シルト、柱痕跡理土は、暗灰色シルトを主体とする。柱痕跡は直径約10～15cmの円形である。遺物は出土していない。

#### S A1704柱列跡

調査区北半の東壁際、Ⅲ層上面で発見した南北方向の柱列跡である。検出した全ての掘立柱建物跡と重複関係にあるが、直接の切り合いがないため新旧関係は不明である。4基の柱穴のうち3基で柱痕跡、1基で柱抜取り穴を確認した。方向は、ほぼ発掘基準線に一致する。3間分で総長約2.9m、柱間は北より1.1m、1.05m、0.75mである。柱穴の平面形は、不整な円もしくは方形で、直徑30～40cm、一辺20～30cm、深さは約10～50cmを計る。掘り方理土は、灰黄色シルト、柱痕跡理土は、黄灰色粘質土を主体とする。柱痕跡は直径約10～15cmの円形である。遺物は出土していない。

#### S E1697井戸跡

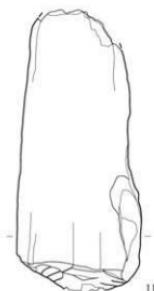
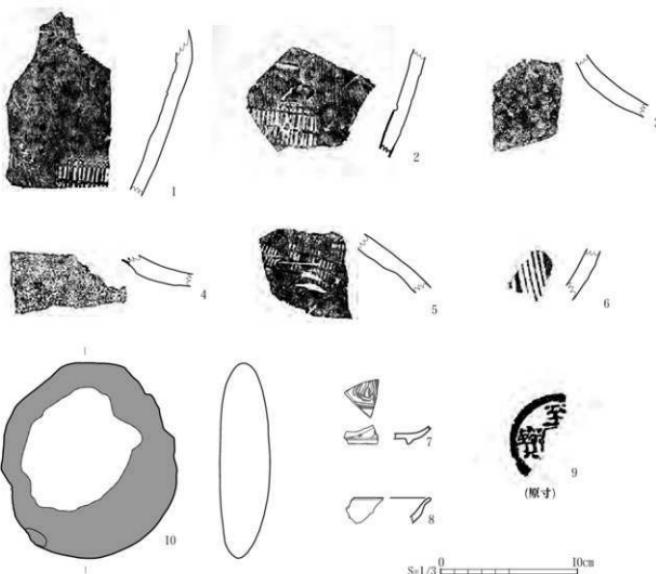
調査区ほぼ中央、東壁際のⅢ層上面で発見した素掘りの井戸跡である。検出した全ての掘立柱建物跡、S X1705と重複関係にあり、S B1700、S X1705より新しいが、他の掘立柱建物跡とは直接の切り合いがないため新旧関係は不明である。平面形はおおよそ円形で、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、上方で外傾する。規模は直径約0.9m、深さは約1mを計る。理土は5層に分けられるが、大別すると2層である。下層（第2図8～9層）には灰色砂質土が厚く堆積し、上層（第2図5～7層）は褐灰色シルトを主体とする。いずれの層にも炭化物と焼土粒およびVI層ブロックが多量に含まれることから人為的に埋め戻されたものとみられる。なお、井戸の周縁には、井戸を開むように深さ5～10cmの小ビットが検出された。遺物は、無釉陶器壺の体部破片（第4図3）が出土した。

#### S E1698井戸跡

調査区北半のほぼ中央、Ⅲ層上面で発見した素掘りの井戸跡である。検出した全ての掘立柱建物跡、S X1705と重複関係にあり、S X1705より新しいが、掘立柱建物跡とは直接の切り合いがないため新旧関係は不明である。平面形はおおよそ円形で、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、中頃から上方で外傾する。規模は直径約1.2m、深さは約1mを計る。理土は5層に分けられるが、大別すると2層である。下層（第2図14層）が灰色粘質土、上層（第2図10～13層）が灰黄色シルトを主体とする。いずれの層にもランダムに炭化物と焼土粒が多量に含まれることから人為的に埋め戻されたものとみられる。なお、S E1697同様、井戸の周縁には井戸を開むように深さ5～10cmの小ビットが検出された。遺物は出土していない。

#### S X1705

調査区北半のやや東より、Ⅲ層上面で発見した焼土遺構である。S E1697・1698と重複関係にあり、それらより古い。理土は4層確認された。1層は硬く焼けた明黄褐色粘土で、東西約1.4m、南北0.5mの範囲をもち、厚さ約0.1mを計る。2層は焼け焦げた黒褐色土で、東西方向ではほぼ1層と同じ範囲を有するが、北側では約20cm大きくなる。厚さは1～3cmを計る。3層は褐灰色シルト、4層が褐灰色シルトで、ほぼ同



S=1/5 0 10cm

番号	種類	遺物・部位	特徴		写真 図版	登録 番号	備考
			外 面	内 面			
1	輪軸陶器・壺	SBT068・側出面	ヘラナギ	ヨコナギ	2-1	R1a	伊田(移入) 東海地方産
2	輪軸陶器・壺	SBT068・側出面	ヘラナギ	ヨコナギ	2-2	R1b	伊田(移入)東海地方 方面 1上同一個体
3	輪軸陶器・壺	SEH097・埋土	ヨコナギ	ヨコナギ	2-3	R2	
4	輪軸陶器・壺	II層	ナギ	ヨコナギ	2-4	R3	
5	輪軸陶器・壺	V層	ヘラナギ	ヨコナギ	2-5	R6	伊田(移入) 東海地方産
6	瓦片土器・縁跡	II・埋土				R8	
7	瓦片陶器・壺	III層			2-6	R11	クルス文様 中国 成・明
8	輪軸陶器・小壺	SBT060・埋土	ロクロナギ	ロクロナギ	2-7	R7	瀬戸・美濃窯
9	錢 貨	SBT000・埋土			2-8	R9	銅口賣
10	青 石	I層	長さ:14.3 幅:13.0 厚さ:3.7 (I層全高に欠火穴有)			R11	
11	柱	SAI702	長さ:34.5 直径:15.1			R1	

第4図 出土遺物

じ東西約2.5m以上、南北1.3mの範囲をもつ。厚さもほぼ同じで約1～2cmを計る。遺物は、鉱澤の小片が出土している。

#### S D1706溝跡

調査区東半のV層上面で発見した溝跡である。調査区外へ延びているため全容は明らかでないが、屈曲するコーナー部分と推定しておく。新旧2時期の変遷を確認した（A→B期）。

**S D1706A**：B期に埋されているため全容は明らかでないが、確認できた長さは約4mで、幅1.6m以上、深さ約0.25mを計る。壁は緩やかに傾斜する。埋土は黄灰色シルト（第3図15層）の単層である。遺物は出土していない。

**S D1706B**：確認できた長さは約3.9mで、幅約1.4m以上、深さ約0.8mを計る。壁は緩やかに傾斜しながら立ち上がり、上端では垂直に近い。埋土は3層に分けられたが、いずれも自然堆積層である。下層（第3図14層）は灰色粘土で縦状に堆積する。上層（第3図12・13層）は灰色粘質土が主体で、間に薄い炭化物層が介在する。遺物は、無釉陶器甕の破片が2点（第4図1・2）出土した。

#### S D1707溝跡

調査区西半のV層上面で発見した南北溝跡である。重複関係はない。確認できた長さは約6.8mで、幅約0.5～0.75m、深さ0.4mを計る。方向は北で約15度西に偏している。断面形は逆台形で、底面は丸底気味である。埋土は3層に分けられるが、大別すると2層である。上層（第3図9・10層）は黄灰色シルトが主体で、下層（第3図11層）は灰色粘質土である。遺物は出土していない。

#### S D1708溝跡

調査区中央、東壁際のV層上面で発見した屈曲する小溝跡である。S D1706溝跡と重複関係にあり、それよりも古い。確認できた長さは南北1m、東西0.8m以上、幅約15～25cm、深さ5～25cmを計る。方向は、東西方向でほぼ発掘基準線に一致する。断面形は逆台形を呈する。埋土は、黄灰色シルトの単層である。遺物は出土していない。

### （3）その他出土遺物

I層より無釉陶器甕、磨石、II層より無釉陶器甕、施釉陶器壺（鉄釉・瀬戸・美濃窯産）、III層より染付器皿（中国産・明代）、IV層より無釉陶器甕、V層より無釉陶器甕のほか、P41埋土よりかわらけ、瓦質土器擂鉢の破片（第4図6）が出土した。

## 3.まとめ

今回の調査では2時期の遺構面を検出した。上層のIII層上面では、掘立柱建物跡、井戸跡、焼土遺構等、下層のV層上面では溝跡を発見した。上層遺構群は、いずれも重複関係にあることから複数時期の変遷が想定される。これら遺構の具体的な年代は、出土遺物が僅少であるため詳述できない面もあるが、以下若干の検討を試みる。まず、III層の年代であるが、層中から明代の染付皿が出土していることから、同層は少なくとも15世紀以降に形成されたものと推測できる。したがって、上層遺構群の上限年代もほぼこの頃に求められよう。下限年代については、掘立柱建物跡の柱穴等から瀬戸・美濃窯産の施釉陶器小皿、無釉陶器甕、瓦質土器擂鉢が出土しており、これらは概ね15～16世紀の特徴を持つようである。以上のことから、上層遺構群の年代は、15～16世紀の範囲で考えておきたい。下層遺構群については、V層とSD

1706B溝跡から無釉陶器甕の破片が出土している。これらは東海地方産で、格子の押印が認められることから13～14世紀にかけてのものと考えられる。

次に、これまでの新田遺跡（寿福寺地区）における中世期の調査成果と対比をしておきたい。第4・11次調査の報告では、中世期の遺構について、「第Ⅲ層」を境としてそれより古い時期のものをA期、新しいものをB期としている。A期の年代は13～14世紀前半、B期が15～16世紀と区分している。これを本調査区検出遺構と対比してみると、概ねV層上面検出遺構はA期に、Ⅲ層上面検出遺構はB期に対応するものと考えられる。

ところで、この「第Ⅲ層」は本遺跡寿福寺地区において広域に分布する黒色～黒褐色砂質土である。堆積年代については、14世紀後半頃と考えられており、時期区分の鍵層として有効な指標となっている。この「第Ⅲ層」に直接対比される土層は、本調査区内では確認されなかったが、これに対応する堆積層はⅢ・IV層とみられ、寿福寺地区的層序とは異なることが明らかになった。

V層上面で発見したS D1706溝跡は、規模が大きく屈曲し、造り替えもなされていることから、これまで寿福寺地区で発見されている屋敷を囲む溝跡と類似する。このことは、本調査区周辺においても寿福寺地区と同様な区画施設を有する屋敷が展開していたことを想定させる。上層遺構群も屋敷内部の構成要素の一部と思われる。今回の調査成果は、中世の屋敷がさらに南にも及んでいた可能性を示したといえる。

なお、古代の遺構については、まったく発見されなかつたことを付け加えておく。

#### 【引用・参考文献】

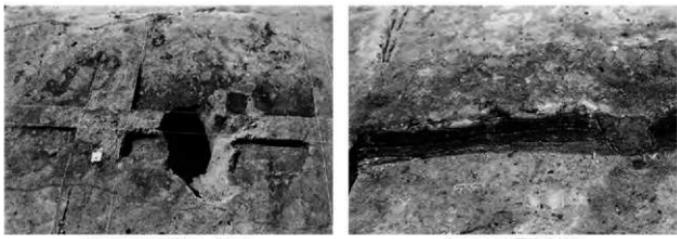
多賀城市埋蔵文化財調査センター『新田遺跡』多賀城市文化財調査報告書第18集 1989

多賀城市埋蔵文化財調査センター『新田遺跡（第4・11次調査報告）』多賀城市文化財調査報告書第23集 1990

多賀城市教育委員会『新田遺跡－第15・17・18次調査報告－』多賀城市文化財調査報告書第43集 1997

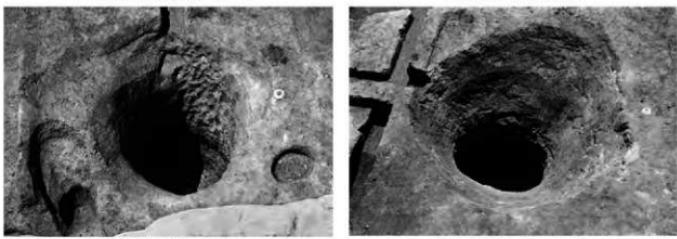


調査区全景 南より



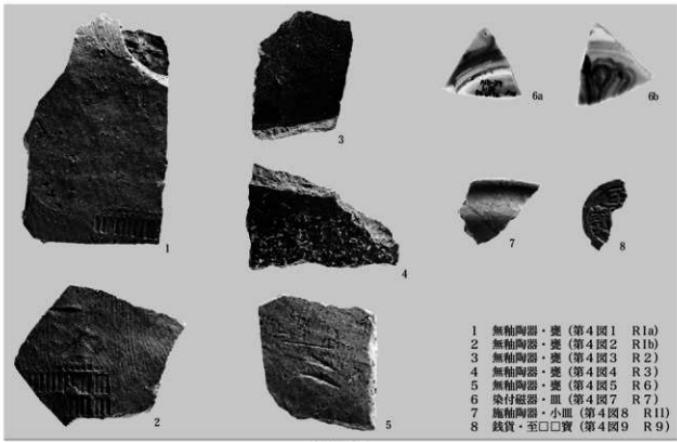
S X1705調査状況 北より

S X1705土層堆積状況



S E1697井戸跡 東より

S E1698井戸跡 北より



出土遺物

- 1 無袖陶器・甕 (第4図1 R1a)
- 2 無袖陶器・甕 (第4図2 R1b)
- 3 無袖陶器・甕 (第4図3 R2)
- 4 無袖陶器・甕 (第4図4 R3)
- 5 無袖陶器・甕 (第4図5 R6)
- 6 染付磁器・皿 (第4図7 R7)
- 7 施釉陶器・小皿 (第4図8 R11)
- 8 鉄質・至口甕 (第4図9 R9)

### III. 新田遺跡第28次調査

#### 1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴うものである。住宅の基礎工事にあたっては直径50cm、長さ8.5mの杭を打ち込むことから、地下の遺構への影響が懸念された。そのため、発掘調査を前提とした協議を行い、平成16年4月2日に承諾書及び依頼書の提出を受けたことから、本発掘調査として実施するに至った。

調査地は、1.3mほど盛土されていたため、大量の土砂が出ることが予想された。そのため、隣接地の地権者に排土置き場の協力を求め、快諾を得られたため、5月7日から調査を実施した。

初日は、重機による表土除去を行い、10日から遺構検出作業を開始した。その結果、調査区全体がすべて中世の溝跡であることが判明した。11日から溝埋土の掘り下げを行い、19日には平面図を作成した。20日に写真撮影を行い、25日には調査区の埋め戻しが終了し全ての調査が終了した。

#### 2. 調査成果

##### (1) 層序

今回の調査では6枚の堆積層を確認した。層序は以下のとおりである。

I a層：現代の盛土である。厚さは1.1～1.3m。

I b層：現代の水田層である。厚さは30～60cmである。

II 層：灰黄褐色粘質土で調査区全体に広がる。厚さ20cm。

III 層：炭化物を含む黒色粘質土。SD1709の検出面であり、新田遺跡寿福寺地区に広がる中世の堆積土と考えられる。厚さ10cm。

IV 層：黄褐色砂質土。厚さ25cm。

V 層：黒色粘質土である。山王遺跡の調査成果から古墳時代前期の水田耕作土と考えられる。厚さ10～20cm。

VI 層：にぶい黄褐色砂質土である。

##### (2) 発見遺構と遺物

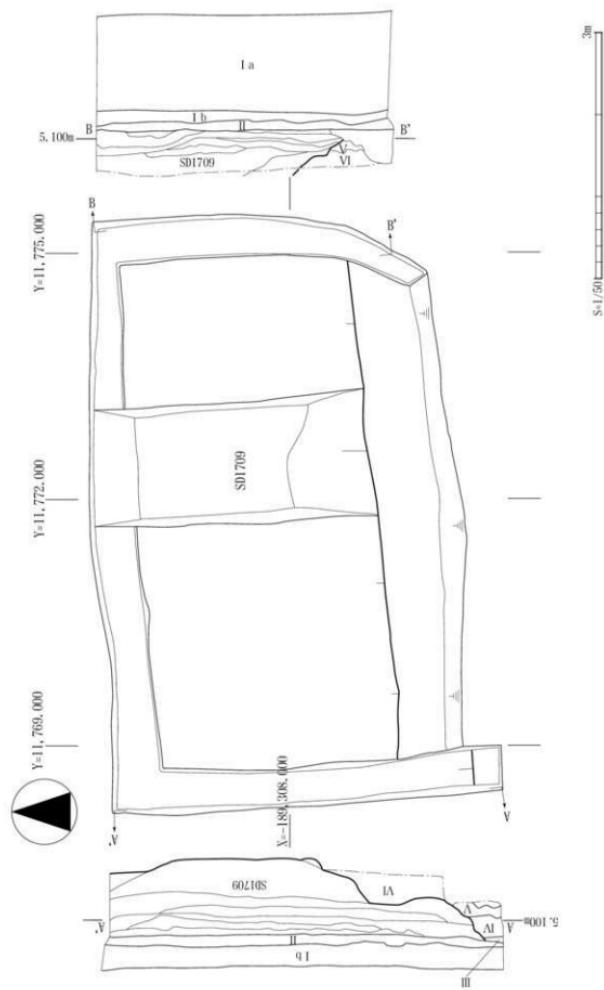
###### SD1709溝跡

III層上面で発見した東西方向の溝跡である。方向は西で約6度南に偏している。規模は上幅3.5m以上、



第1図 調査区の位置

第2図 調査区全体図



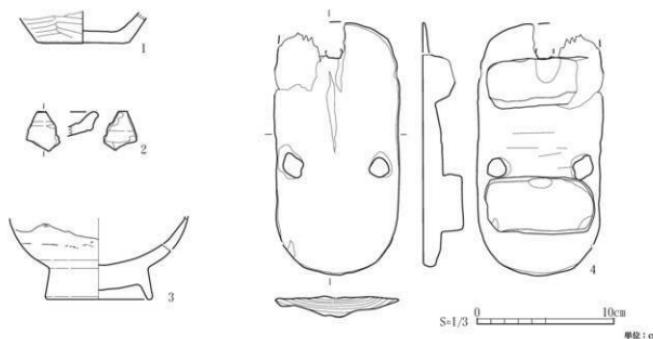
下幅2.1m、深さ90cmである。断面形は上方が皿状であり、下方は逆台形を呈する。埋土は、黒褐色粘質土を主体とする自然堆積土である。遺物は、瓦質土器、下駄、漆器椀が出土している。

### 3. まとめ

今回の調査では、中世の屋敷を巡る溝跡の推定地において溝跡1条を発見した。年代については、新田遺跡では、溝跡の検出面であるⅢ層に対応する層がこれまでの調査から広範囲に確認され、15・16世紀の遺構がこの上面で検出されている。このようなことから、15・16世紀頃のものと考えておきたい。

#### 【引用・参考文献】

多賀城市教育委員会『新田遺跡（第4・11次調査報告）』多賀城市文化財調査報告書第23集 1990



番号	種類	遺跡・層位	特徴		口径 残存率	横 径 残存率	高 さ 回 数	写 真 版 面	登 録 號	備 考
			外 面	内 面						
1	瓦質土器	SB1700・1層	ナデ→ヘラミガキ	ナデ	-	(6.8) 10/24	-	R1P		
2	無釉陶器・甕	日刷	ヨコナデ	ヨコナデ					R2P	
3	無物・漆器椀	SB1700・1層	黑色漆塗り→赤色漆塗り	赤色漆塗り	-	7.6 24/24	-	R2W	本取り：和田 留置：ブナ	
4	下駄	SB1700・1層				長さ15.8cm 幅3.2cm 高さ3.0cm		R1W		

第3図 出土遺物実測図



調査区全景 東より



第4図 寿福寺地区中世遺構概略図

## IV. 新田遺跡第29次調査

### 1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、新田遺跡北地区における個人住宅建設に伴う発掘調査である。平成16年6月11日、地権者より当該区における住宅建築と埋蔵文化財の関わりについて協議書が提出された。建築計画では、基礎工事の際にソイルコラム工法によって直径600mm、長さ4mのコンクリート柱を埋め込むことから、地下の遺構への影響が懸念された。そのため、発掘調査の実施を前提とした協議を行い、平成16年7月22日に依頼書の提出を受けて、本発掘調査の実施に至ったものである。また、北側の専用通路および東側に隣接する宅地については、第24・25次調査（平成15年度実施）の際に不法投棄された産業廃棄物が確認されており、通路を隔てた北側の第28次調査区においてもその存在が知られたことから、当該地においてもそれらの存在が予想され、調査を行うにあたって障害となることが考えられた。7月22日に調査日程や注意事項について業者を交えて協議を行った際、産業廃棄物についてはその存在が確認できた段階で調査を一時中断し、業者側が完全に撤去した後に調査を再開することで合意した。それを受けて7月22日に地権者より発掘調査依頼書が提出され、8月17日に調査を開始した。はじめに重機によって表土除去したところ、調査区南東部を中心として産業廃棄物を確認し、調査を中断して一旦埋め戻した。23日、産業廃棄物の撤去を確認し、調査再開。盛土除去に着手した。24日、重機によりⅠ・Ⅱ層を除去。Ⅲ層上面で遺構検出作業を行い、南部部でS D1710東西溝を検出。Ⅲ層は薄く、部分的にⅣ層が露出した。25日、S D1710溝跡を一段掘り下げ、東壁際を断ち切ったところ2時期の重複があることを確認した。26日、西壁際でⅣ層上面から掘り込まれたS D1711溝跡を発見。30日、Ⅳ層上面で南北溝を2条発見。31日、台風のため午前中作業中止。午後S D1711溝跡の埋土の掘り下げ、業者に依頼して基準点移動。9月1日、S D1710・1711の埋土掘り下げる（～2日）。実測図作成用の基準点を設定し、Ⅲ・Ⅳ層上面検出遺構の平面図作成。3日、Ⅲ・Ⅳ層上面検出遺構の全景写真撮影。6日、V層除去。VI層が水田層であることを確認。東・北壁の土層断面図作成（～7日）。7日、水田遺構の畦畔検出状況を写真撮影。その後V層を除去し、畦畔・田面を検出してそれらの写真撮影や平面図および断面図を作成する。8日プラント・オパール分析のためVI層のサンプリングを行い、すべての調査を終了した。

### 2. 調査成果

今回の調査で発見した遺構は、古墳時代の水田跡1面、古代の溝跡2条、中世の溝跡2条である。



第1図 調査区位置図

#### S X1714水田跡

V層に覆われる水田跡である。VI層の黒色粘土を耕作土としており、南北方向の畦畔1・2と東西方向の畦畔3によって区画された田面4区画を検出した。その上面には不定方向の足跡がほぼ全域に認められた。畦畔3は中央付近が途切れており、水口と見られる。畦畔は幅35~50cmであり、畦畔1の北半部や畦畔2の南半部、および畦畔3の東半部では高まりを検出できなかつたが、足跡による擾乱の及んでいない範囲が帯状に延びており、畦畔の位置を反映していると理解した。耕作土からはイネのプラント・オーバルが高い密度で検出されている（附章2）。

#### S D1712溝跡

IV層上面で発見した溝跡である。III層によって覆われており、調査区中央部付近から北東隅にかけて湾曲して延びている。東側が一段深くなつており、規模は上幅0.9~1.2m、深さは東側の深い部分で5~14cm、西側の浅い部分で5~8cmである。埋土は褐灰色砂質土であり、上位には白色の軽石粒が混入している。ほぼ完全に埋没した後、その上面に灰白色火山灰小ブロックの堆積が確認できる。

#### S D1713溝跡

IV層上面で発見した南北溝跡である。III層によって覆われており、S D1712溝跡の西側にあって同様に湾曲して延びている。規模は上幅0.3~0.6m、深さは最も深い部分で7cmである。埋土は、S D1712と類似した褐灰色砂質土である。

#### S D1711溝跡

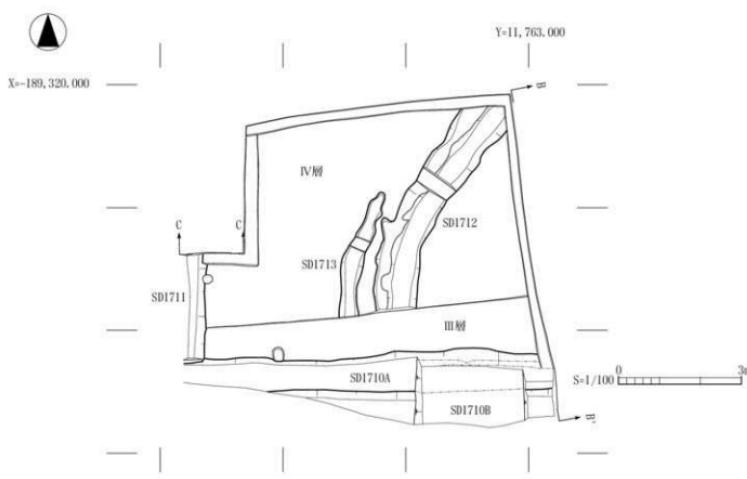
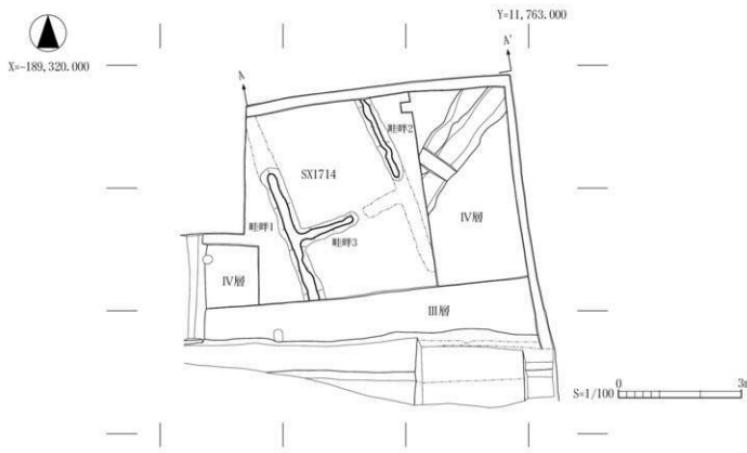
IV層上面で発見した南北溝跡である。調査区西壁際で検出したものであり、上幅1.3m以上、深さ0.5mである。埋土は下層が黒褐色粘質土であり、上層は黒色・灰黄褐色砂質土である。下層の黒褐色粘質土はオーバーフローしてIV層の一部を覆っているが、その部分では粘性が減じてIII層と類似した色調・土性を呈している。遺物は古代の土器類の細片が数点出土している。

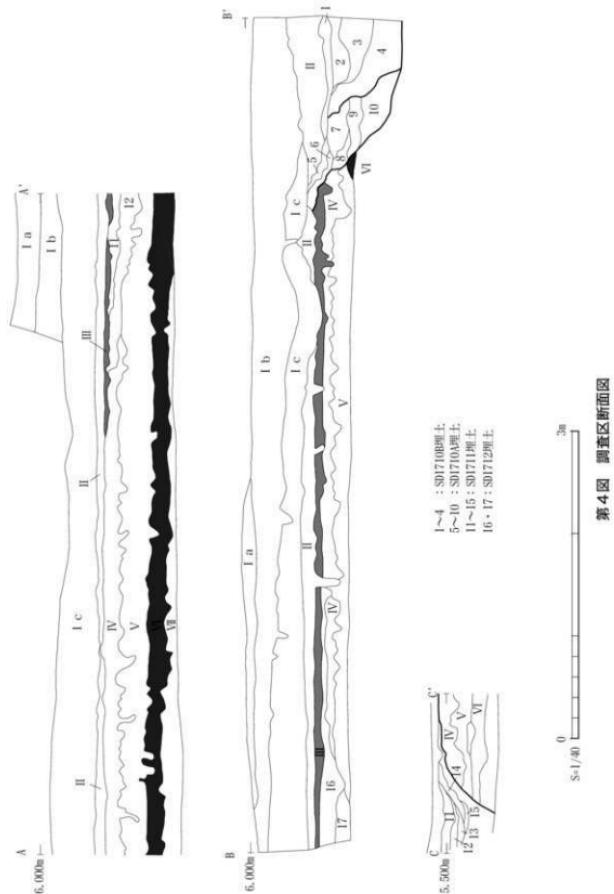
#### S D1710溝跡

III層上面で発見した東西溝跡である。調査区南壁際で検出したものであり、2時期以上の重複がある（A→B期）。方向は東西発掘基準線とおおよそ一致しており、規模はS D1710Aが上幅1.3m以上、S D1710Bが上幅1.0m以上であり、深さはいずれも検出面より約1.0mである。S D1710Aの埋土は下層に粘質土が堆積しているが、上層にはV層あるいはVI層のブロックが多く含まれており、半ば埋没した後に人為的に埋められたと推定される。

### 3.まとめ

- (1) 古墳時代から中世にかけての3時期の遺構を発見した。
  - (2) 古墳時代の遺構としては水田跡を1面発見した。プラント・オーバル分析の結果からも、実際に稻作が行われていたことが証明された。年代については、これまで山王遺跡の各地点において前期の水田跡が発見されていることから、本遺構の年代もそれらと同様と考えておきたい。
- (2) 古代の遺構としては10世紀前葉以前の溝跡を2条発見した。性格等は不明である。
- (3) 中世の遺構としては溝跡を2条発見した。そのうちIII層に覆われるS D1711は14世紀後半以前のものであり（註）、性格については不明である。III層上面で検出したS D1710は15・16世紀頃の遺構であり、寿福寺地区で発見されている屋敷跡の外周の区画溝との関係が注目される（本書16頁第4図参





第4図 調査区断面図

照)。この屋敷跡は南北290m、東西120～190mの範囲に幅7mの大溝を巡らしたもので、今回の調査区はその南辺推定線のやや南側に位置している。東側に隣接する第26次調査区のS D1695は位置関係および埋土の状況からS D1710とは一連の遺構であり、同位置で数回の改修が認められる状況は北辺・西辺の状況と共通している。また、これらの北側約17mの地点においても上幅3.5m以上の規模をもつS D1709が発見されている(第28次調査)。年代は同様に15・16世紀頃である。これらについてはいずれも南辺の区画溝の可能性があり、両者の関係については今後の周辺の調査成果によって検討していきたい。

(註) 本調査における田層は第4・11次調査の田層に対応するものであり、その年代は下記報告書に掲っている。  
多賀城市埋蔵文化財調査センター『新田遺跡(第4・11次調査報告)』多賀城市文化財調査報告書第23集 1990



調査区全景 南東より



S X1714調査風景 西より



同上 東より



土層堆積状況

## V. 新田遺跡第30次調査

### 1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴うものである。今回の開発計画は、基礎工事に支柱杭を地下8.5mまで打ち込むパイル工法をとることから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、地権者および施工業者と基礎工法の変更について協議を行ったが、申請された工法で実施することに決定した。これにより、平成16年9月21日付で発掘調査の依頼を受けたことから本発掘調査として実施した。

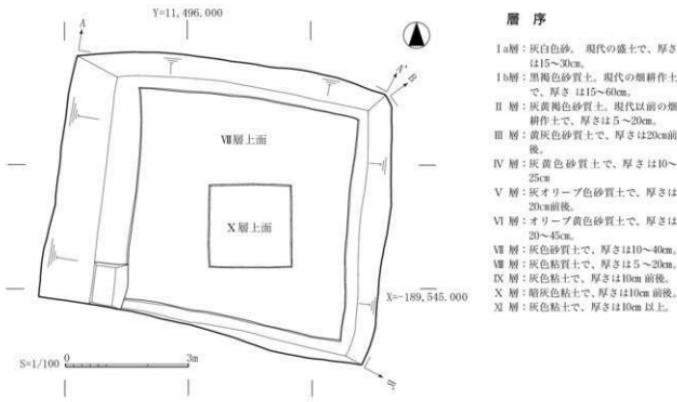
調査は10月7日から開始し、はじめに重機を使用して造成時に伴う盛土(Ⅰa層)・現代の畑耕作土層(Ⅰb層)の除去を行った。

続いて8日から14日にかけてII層～VII層及び一部X層まで掘り下げたが、各層上面で

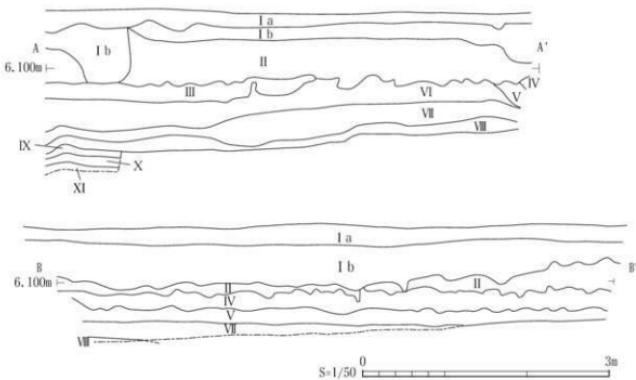
遺構・遺物は発見されなかった。この間に測量杭を設置し、平面図・断面図の作成、写真撮影も随時行った。15日には全景写真撮影、器材の撤収を行い、18日に埋め戻しを行い一切の調査を完了した。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区平面図



第3図 調査区断面図

## 2. まとめ

今回の調査では、IX・X・XI層についてプラント・オパール分析を実施したところ、3層すべてからプラント・オパールが高い密度で検出されている（附章2）。本遺跡の東側に接する山王遺跡においても、これまでの調査で古墳時代前期の水田跡が発見されており、これと一連の水田跡が本地区周辺に存在する可能性が強まったといえる。今後の発掘調査の視点としては、具体的に畦畔等の遺構の把握に努めたい。



調査区全景 東より

## VI. 市川橋遺跡第44次調査

### 1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴うものである。今回の建設工事は、住宅の基礎工法に直径11.4cmの鋼管杭を地下8mまで打ち込むいわゆるパイル工法をとることから、地下の埋蔵文化財に影響を及ぼすことが考えられた。当該地区周辺では土地区画整理に伴う大規模な発掘調査を実施しており、その調査成果によると当該地は現地表から約2.6m下に遺構面があると予想された。また、遺構が希薄な場所であることから、はじめに確認調査を実施し、遺構を発見した場合に本発掘調査を行うこととした。地権者からは平成16年4月26日付で発掘調査の依頼があり、それを受け5月6日から現地において表土除去を行った。その結果、溝跡などの遺構を発見したことから、本発掘調査へ切り替えることになった。10日から、遺構の埋土を掘り下げると共に、随時平面図・断面図作成と写真撮影などをおこなった。13日には埋め戻しと器材の撤収を行い一切の調査を終了した。

### 2. 調査成果

#### (1) 層序

- I a層：現代の盛土で、厚さは約2.1m。
- I b層：現代の水田耕作土で、厚さは約47cm。
- II 層：調査区の東半部に堆積する暗オリーブ褐色粘質土で、厚さは5～10cm。粒状の灰白色火山灰を少量含む。
- III 層：調査区全面に堆積する黒褐色粘質土で、厚さは5～18cm。灰白色火山灰を含む。
- IV 層：調査区の北西部に堆積する黒褐色粘土。V層のブロックを多く含む。
- V 層：明黄褐色シルト。この上面が古代の最終遺構検出面となる。

#### (2) 発見遺構と遺跡

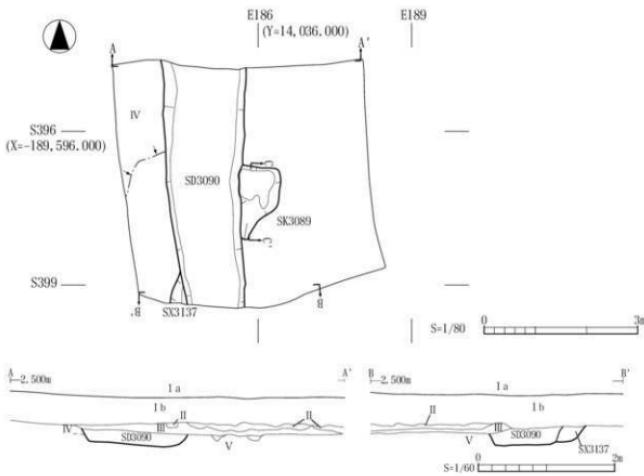
今回の調査では溝跡1条、土壤1基等を発見した。これらは全てⅣ層に覆われている。

#### S D3090溝跡

調査区西側のⅣ層上面で発見した南北溝跡である。S K3089およびS X3117と重複しており、それらよ



第1図 調査区位置図



第2図 遺構平面図・断面図

り新しい。規模は長さ4.7m以上、上幅1.1~1.7m、下幅0.9~1.3m、深さ18~25cmである。方向は北で2度西に偏している。断面形は逆台形である。底面はほぼ平坦で、調査区内での比高はほとんどない。埋土は1層で、少量の炭化物とV層の粒を含む黒褐色粘土である。遺物は土師器甕（B類）が出土している。  
SK3089土壤

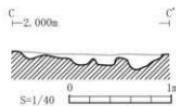
調査区中央部のV層上面で発見した。SD3090と重複しており、これよりも古い。平面形は不整形で南にやや張り出しており、底面は凹凸がある。規模は南北1.4m、東西0.7m以上で、深さは15cmである。埋土は多量の砂とV層のブロックを含む黒褐色シルトである。遺物は出土していない。

#### S X3137

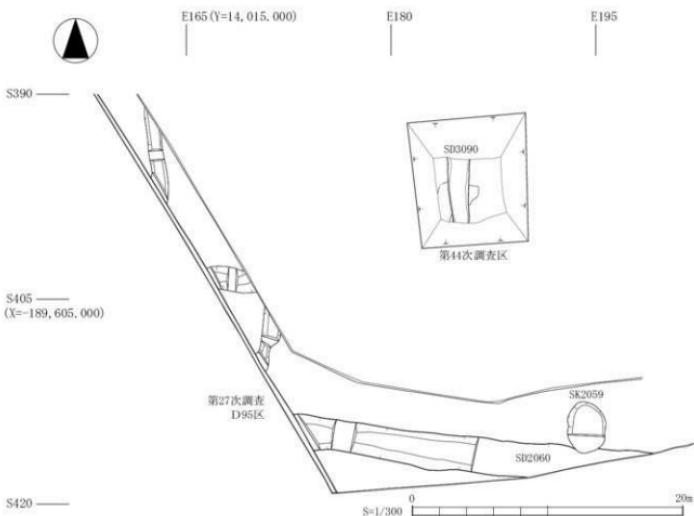
調査区南端のV層上面で発見した。SD3090と重複しており、これよりも古い。調査区の外へ延びているため不明な点が多く、またSD3090の古い段階の溝跡の可能性もあるが確認できなかった。深さは23cmで、埋土は多量の砂とV層の粒を少量含む黒褐色粘質土である。遺物は出土していない。

### 3.まとめ

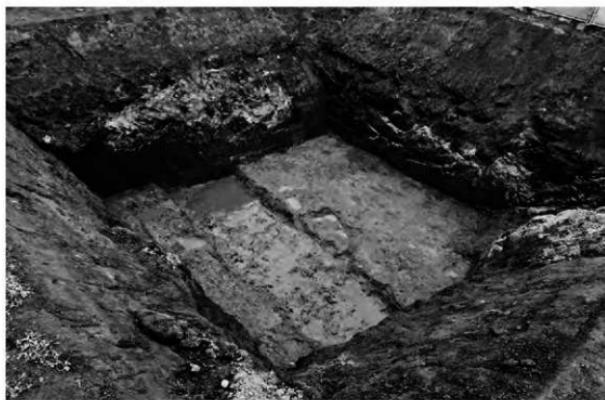
今回の調査では、溝跡1条、土壤1基等を発見した。これらの遺構は全て灰白色火山灰を含むⅢ層に覆われることから、10世紀前葉以前の年代と考えられる。SD3090については土師器甕（B類）が出土していることから、年代は8世紀後葉～10世紀前葉と考えられる。



第3図 SK3089断面図



第4図 第44次調査区と周辺の調査区



調査区全景 南西より

## VII. 市川橋遺跡第46次調査

### 1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、市川橋遺跡城南地区における個人住宅建設に伴う発掘調査である。平成16年5月7日、地権者より当該区における住宅建築と埋蔵文化財の関わりについての協議書が提出された。建築計画では基礎工事の際に直径20cmの鋼管杭を現地表下8mの深さまで打ち込む工法を探るため、地下への影響が懸念された。そのため、発掘調査の実施を前提とした協議を行い、平成16年6月4日に発掘調査依頼書の提出を受け、本発掘調査の実施に至ったものである。

調査は6月14日より着手した。はじめに重機によって表土を除去し（～15日午前）、排土は北側の保留地を借用して仮置きした。15日に調査区内に排水溝を掘削し、16日からIV層上面の遺構検出作業を開始した。17日に調査区中央部で発見したSK3155の埋土を掘り下げたところ、ほぼ完形の須恵器瓶をはじめ土器破片が多く出土した。また水準点を移動し、調査区西・南壁の土層断面図を作成した。18日にSK3155遺物出土状況の写真撮影を行い、平面図作成のための測量原点の移動を行った。21日にはSK3155、SD3149・3150・3151などの土層断面図を作成し、並行して調査区内に測量用の基準点を設置した。22日、IV層上面検出遺構については平面形および重複関係についておおよそ理解が得られたので、縮尺1/20で平面図の作成を開始した。23日にIV層上面検出遺構の写真撮影を行い、24日にはIV層を除去してV層上面における遺構検出作業を開始した。29日にSB3147・3148の柱穴の精査を行い、それらの平面図や断面図を作成した。30日に調査区の埋め戻しと並行して器材を撤収し、すべての調査を終了した。

### 2. 調査成果

#### （1）層序

Ia層：区画整理の際の盛土。厚さは約1.8m。

Ib層：現代の水田耕作土。厚さは25～30cm。

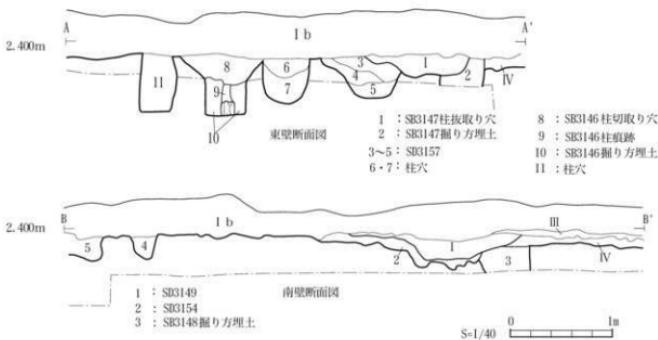
II層：黒色粘土層。厚さは約10cm。

III層：黒褐色砂質土。灰白色火山灰粒を含み、最も新しい遺構を覆っている。厚さは約6cm。

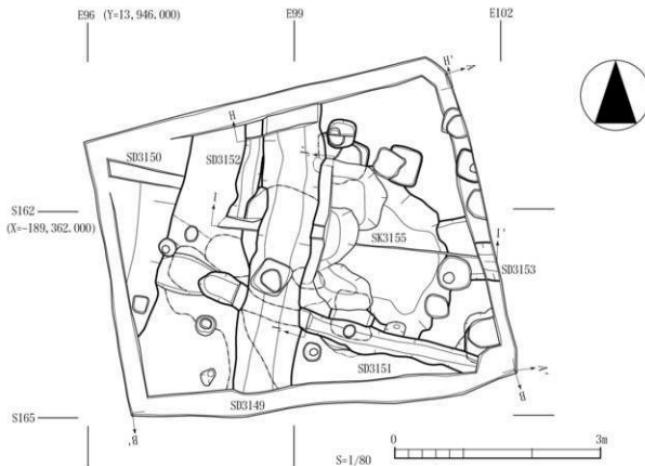
IV層：オリーブ褐色砂質土。10世紀前葉以前の自然堆積層で、南半部に部分的に見られる。上面は遺構検出面となっている。厚さは約10cm。



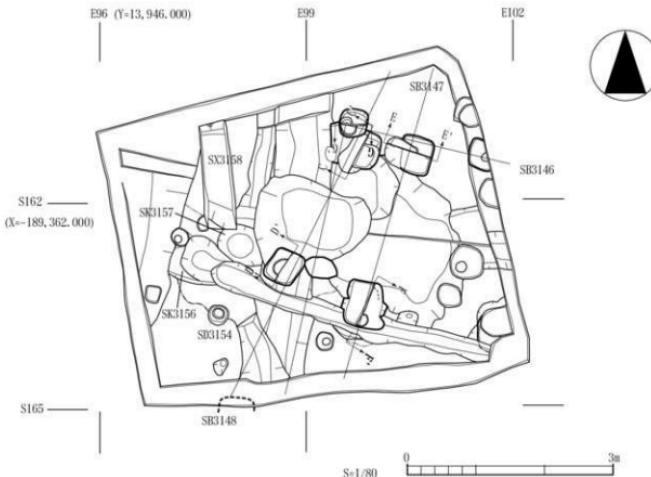
第1図 調査区位置図



第2図 調査区東壁・南壁土層断面図



第3図 遺構平面図(1)



第4図 遺構平面図（2）

V層：ぶい黄色砂質土。この上面が古代の最終遺構検出面。

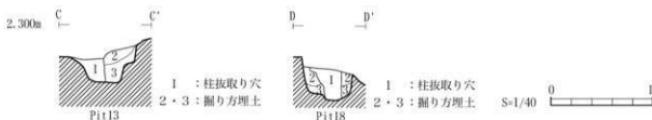
#### (2) 発見遺構と遺物

##### S X830道路跡

調査区西壁際のV層上面で発見した東1道路である。本道路は、路面を周囲より一段高く掘り下げた構造であり（註）、路面や側溝上に堆積したII～IV層を確認したにすぎない。その厚さは30cm以上あり、路面や側溝等を検出するまでは至らなかった。方向は、北で約15度東に偏している。

##### S B3148建物跡

調査区中央部のV層上面で発見した掘立柱建物跡である。南北に並ぶ2間分の柱列から想定したもので、IV層によって覆われている。S B3146、S D3149と重複しており、それらより古い。北側とその南側

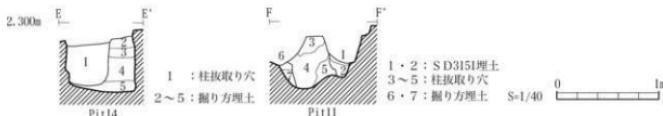


第5図 S B3148柱穴断面図

の柱穴には柱抜取り穴があり、柱のあたりで計測すると、方向は北で約34度東に偏しており、柱間は約1.9mである。柱穴の平面形はおおよそ長方形であり、北側の柱穴は長辺80cm、短辺65cm、南側の柱穴は長辺50cm、短辺45cmである。埋土は黄灰色や暗灰黄色土を主体とし、V層ブロックを含んでいる。抜取り穴は地山ブロックや炭化物を含む黒褐色粘質土である。遺物は抜取り穴から土師器甕、須恵器杯・瓶が出土している。土師器甕はすべてB類であり、須恵器杯はII類が1点、III類が2点ある。

#### S B3147建物跡

調査区東半部のIV層上面で発見した掘立柱建物跡である。南北隅にあたる3基の柱穴を検出した。いずれの柱穴にも柱抜取り穴がある。S B3146、S D3151・3153、S K3155と重複しており、S D3151、S K3155より古い。柱穴の中心に柱位置を想定すると、方向は北で約15度東に偏しており、柱間は南北方向で約2.3m、東西方向で約2.1mである。柱穴の平面形はおおよそ方形であり、規模は一辺55～65cm、検出面からの深さは約60cmである。埋土は北側の柱穴でみるとオリーブ褐色土、暗灰黄色土、黒褐色土が互層となっている。柱抜取り穴は黒褐色土や暗灰黄色土である。遺物は柱抜取り穴から土師器杯・甕、須恵器杯・甕、須恵系土器杯が出土している。土師器杯はB I類が1点あり、口縁部や体部破片もすべてB類である。土師器甕についても確認できるものはほとんどがB類である。須恵器杯はII類が1点、III類が3点あり、そのほか口縁部に油煙が付着したものが1点出土している。須恵系土器杯はすべて底部破片であり、43点出土している。



第6図 S B3147柱穴断面図

#### S B3146建物跡

調査区東半部のV層上面で発見した掘立柱建物跡である。その北西隅にあたる3基の柱穴を検出した。北西隅の柱穴は抜き取られていたが、その東側の柱穴では切取り穴の下に柱材が残存していた（第4図）。S B3147・3148、S D3149・3153、S K3155と重複しており、S B3148より新しいが、S D3149、S K3155より古い。北西隅柱穴の柱抜取り穴の中心に柱位置を想定すると、東西の方向は東で約13度南に偏しており、柱間は約2.1mである。柱穴は方形を基調とし、規模は一辺約40cm、検出面からの深さは約50cmである。埋土は灰黄褐色土や暗灰黄色土などの砂質土である。遺物は掘り方から須恵器杯・甕が出土している。須恵器杯はIII類が2点ある。抜取り穴からは土師器杯・甕、須恵器杯・甕・瓶が出土している。土師器杯・甕はすべてB類であり、須恵器杯はIII類が1点ある。



第7図 S B3146柱穴断面図

#### S D3149溝跡

調査区中央部のIV層上面で発見した南北溝跡である。III層によって覆われており、北壁から南壁にかけて延びている。S B3148・S K3155・S D3151と重複しており、それより新しい。方向は、北壁付近では南北基準線におおよそ一致しているが、それより南側では北で約10度東に偏している。規模は上幅90～130cm、深さ25cmである。底面は南側に向かって緩やかに傾斜しており、調査区の北壁と南壁においては15cmの比高がある。埋土は黒褐色粘質土を主体としている。遺物は土師器杯・高台付杯・甕・須恵器杯・甕・瓶、須恵系土器杯が出土している。土師器杯はほとんどがB類であり、7点中、B II類が4点、B V類が3点ある。土師器甕もほとんどがB類であるが、体部外面をハケメ調整したものが3点ある。須恵器杯は17点中、II類が1点、III類が9点、V類が7点ある。須恵系土器は底部破片のみ367点出土している。

#### S D3151溝跡

調査区南半部のIV層上面で発見した東西溝跡である。S D3150の東側から調査区東南隅に向かって延びている。S B3147・S K3155・3156・S D3149と重複しており、S B3147・S K3155・3156より新しく、S D3149より古い。方向は東で約14度南に偏しており、規模は上幅30～45cm、深さ10～26cmであり、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。底面は東側に向かって傾斜しており、S D3149の東側付近と調査区東南隅の比高は14cmである。埋土は地山の粒子を含む黒色粘質土である。遺物は土師器杯・甕・須恵器杯・甕・瓶、須恵系土器杯が出土している。土師器杯はすべてB類であり、5点中B I類が1点、B II類が3点、B V類が1点である。土師器甕もすべてB類である。須恵器杯はII類とIII類がそれぞれ1点ある。須恵系土器は底部破片のみ186点出土している。

#### S D3152溝跡

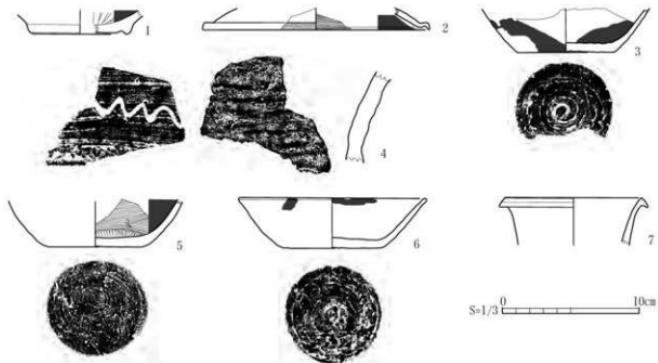
調査区中央部においてS X3158の埋土上面で検出した南北溝跡である。調査区北壁から南側に向かって延びており、方向は北で約10度東に偏している。S D3149・S K3155・S X3158と重複しており、S X3158より新しく、S D3149・S K3155より古い。規模は上幅35cm、深さ5～12cmであり、底面はおおよそ平坦である。埋土は暗灰黄色砂質土である。遺物は土師器杯・甕・須恵器杯・甕・瓶、須恵系土器杯が出土している。土師器杯・甕はすべてB類であり、須恵器杯はV類が2点ある。須恵系土器杯は底部破片のみ26点出土している。

#### S D3153溝跡

調査区東壁際のIV層上面で発見した東西溝跡である。S K3155と重複しており、それより新しい。S K3155によって大きく破壊されているが、方向はおおよそ東西基準線と一致している。規模は上幅90cm、深さは35cmである。埋土は2層に区分され、上層が炭化物や地山の粒子を含む黒褐色土、下層は炭化物をわずかに含む暗灰黄色土である。遺物は土師器杯・甕・須恵器杯・甕・須恵系土器杯が出土している。土師器甕はA類（外面ハケメ調整）とB類があり、須恵器杯はII類が1点ある。須恵系土器は底部破片のみ20点出土している。

#### S D3154溝跡

調査区南西部で発見した溝跡である。南壁から西壁にかけてやや湾曲して延びている。IV層に覆われており、V層上面で検出した。S D3149・3150・3151・S K3156と重複し、それより古い。規模は上幅1.0m（南壁断面）、深さ25cmである。底面はおおよそ平坦であるが、壁の立ち上がりは一様ではない。埋土は暗灰黄色砂質土である。

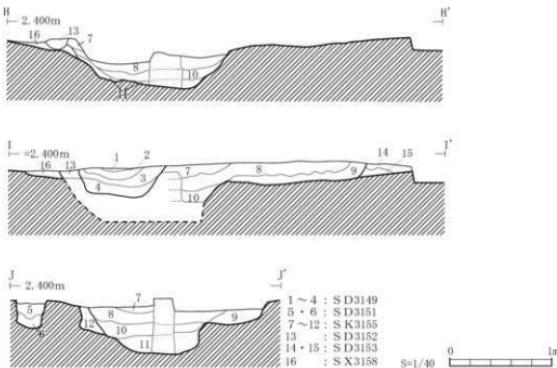


番号	種類	遺物・層位	特徴		口径 保存率	底径 保存率	厚さ 高さ	写真 図版	登録 番号	備考
			外表面	内表面						
1	土師器・高台付杯	S D3149・1層	ロクロナデ、底面:ロクロナデ	ヘラミガキ・黑色施釉	—	(7.0) 7/24	—		R148	
2	土師器・蓋	S D3149・2層	ロクロナデ-ヘラミガキ	ヘラミガキ・黑色施釉	(16.0) 2/24	—	—		R31	
3	須恵器・杯	S D3149・2層	ロクロナデ、底面:ヘラ切り	ロクロナデ	—	7.2 17/24	—		R162	指標。体部内外面に施釉付着
4	須恵器・甕	S D3151	ロクロナデ、半纏波状文	ナデ	—	—	—		R48	
5	土師器・杯	S D3152・1層	ロクロナデ、底面:斜軸小切り	ヘラミガキ・黑色施釉	—	7.0 24/24	—		R34	BV類
6	須恵器・杯	S D3153・1層	ロクロナデ、底面:ヘラ切り	ロクロナデ	13.9 20/24	7.2 24/24	3.8		R36	指標。口縁部内外面に施釉付着
7	須恵器・甕	S D3153・1層	ロクロナデ	ロクロナデ	(17.0) 4/24	—	—		R52	内外面に自然釉

第8図 溝跡出土遺物

#### S K3155土壤

調査区中央部のIV層上面で発見した土壤である。S B3147・3146、S D3149・3153と重複しており、S B3147・3146、S D3153より新しく、S D3149より古い。平面形は東西方向にやや長い不整形であり、西側が深くくぼんでいる。規模は長軸で3.3m、短軸で約2mである。深さは西側のくぼんだ部分で40cm、そのほかの部分ではおよそ25cmである。底面は凹凸が多く、壁の立ち上がりも一様ではない。埋土は2層に大別できるがいずれも黒褐色砂質土を主体としている。遺物は土師器杯・甕・須恵器杯・高台付杯・甕・瓶・須恵系土器杯・斎串が出土している。土器類は各層から各器種が出土しており、層ごとに異なった傾向は見られない。斎串は底面付近から出土したものである。土師器杯はすべてB類であり、51点中B I類が4点、B II類が40点、B V類が7点ある。土師器甕は500点以上の破片が出土しており、そのうち口縁部破片が88点ある。いずれもB類であり、端部の形状からすべて別個体の可能性がある。A類で底部にムシロ状圧痕のあるものが2点ある(第11図6・7)。須恵器杯は38点中、II類が3点、III類が18点、V類が17



第9図 SK3155断面図

点である。甕は少なくとも4個体確認できる(第12図1~4)。口縁部から頸部にかけての破片であるが法量はおよそ近似している。須恵系土器はすべて破片資料であり1,137点出土している。

#### S K3156土壤

調査区南西部のIV層上で発見した土壤である。S D3149・3150・3151、S K3157と重複しており、S K3157、S D3149より新しいが、S D3150・3151より古い。平面形は東西にやや長い楕円形であり、規模は長径80cm、短径70cm、深さ10cmである。埋土はにぶい黄褐色砂質土である。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕、須恵系土器杯が出土しており、土師器杯はA類とB類が各1点あり、甕は確認できるものはすべてB類である。須恵系土器は底部破片のみ19点出土している。

#### S X3158

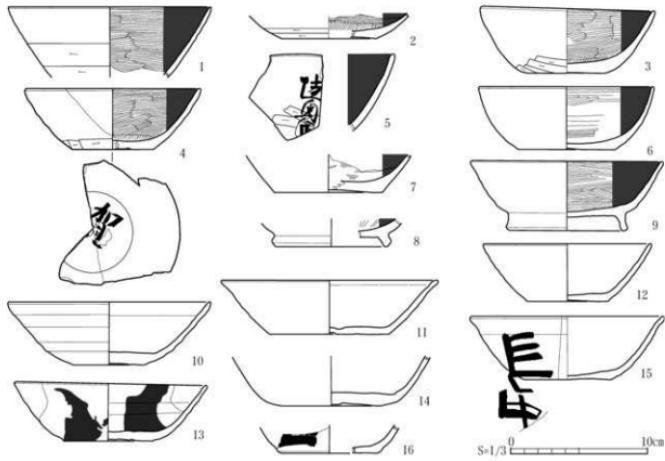
調査区西北部のV層上面で発見した落ち込みである。S D3150からS D3152にかけてのわずか0.8mの範囲においてその南壁を検出し、北壁の立ち上がりも確認した。S D3150・3152、S K3157と重複しており、それより古い。規模は幅1.9m以上、深さ0.3mである。埋土はV層に近似した黄褐色砂質土である。遺物は出土していない。

### 3. 考察

#### (1) 遺構の年代

第46次調査で発見した遺構は、道路跡1条、掘立柱建物跡3棟、溝跡5条、土壤3基、落ち込み1基である。

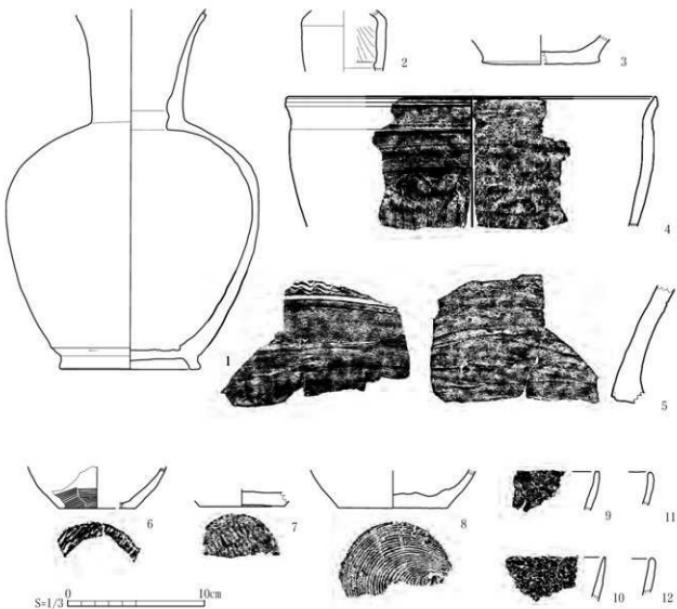
IV層より古く、須恵系土器を含まないS B3148、S D3154は10世紀前葉を下限とするものである。S B3148の柱抜取り穴から土師器杯・甕B類、須恵器杯II・III類など少量出土しているが、構築年代を示す手かりはない。



半径: cm

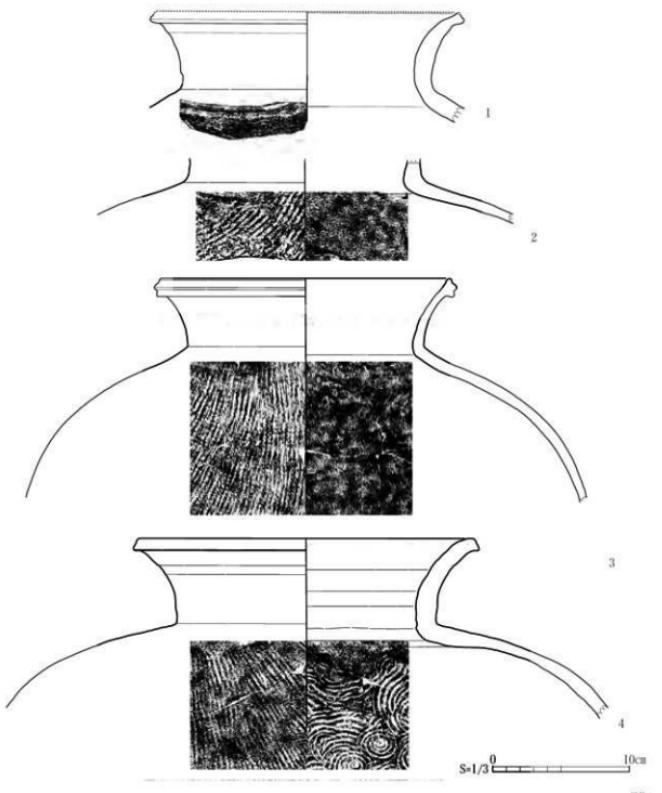
番号	種類	遺構・部位	特徴			口径 底径 残存率	底 壁 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外 面	内 面	口 底						
1	土鍋器・杯	S K3155・1層	ロクロナギ、底部下半月輪 ヘラガズリ	ヘラミガキ・黑色施釉	(15.0) 5/24	—	—	—	R156		
2	土鍋器・杯	S K3155・1層	ロクロナギ、底部下半月輪 ヘラガズリ	ヘラミガキ・黑色施釉	—	(7.0) 11/24	—	—	R155	B I類	
3	土鍋器・杯	S K3155・1層	ロクロナギ、底部下半月輪 ヘラガズリ	ヘラミガキ・黑色施釉	(13.0) 13/24	6.0 24/24	5.0	R10	B V類		
4	土鍋器・杯	S K3155・2層	ロクロナギ、底部下半月輪 ヘラガズリ	ヘラミガキ・黑色施釉	(13.0) 4/24	(6.0) 14/24	4.5	R22	B IIc類、底部施釉「匁」		
5	土鍋器・杯	S K3155・2層	ロクロナギ、底部下半月輪 ヘラガズリ	ヘラミガキ・黑色施釉	—	—	—	R24	底部施釉「匁」		
6	土鍋器・杯	S K3155・1層	ロクロナギ、底部:未切り	ヘラミガキ・黑色施釉	(13.0) 4/24	(7.2) 8/24	4.7	R8	B II類		
7	土鍋器・杯	S K3155・1層	ロクロナギ、底部:未切り	ヘラミガキ・黑色施釉	—	(8.0) 12/24	—	R154	B II類		
8	土鍋器・高台付杯	S K3155・1層	ロクロナギ	ヘラミガキ・黑色施釉	—	(8.2) 7/24	—	R149	B II類		
9	土鍋器・高台付杯	S K3155・2層	ロクロナギ、底部:へたり り?	ヘラミガキ・黑色施釉	(14.3) 3/24	9.1 24/24	5.2	R27	底部外側に黑色施釉付着		
10	瓶壺器・杯	S K3155・1層	ロクロナギ、底部:切削部 ヘラガズリ	ロクロナギ	15.0 11/24	5.2 23/24	4.7	R13	V瓶、内外両縁部に施釉付着		
11	瓶壺器・杯	S K3155・1層	ロクロナギ、底部:へたり り?	ロクロナギ	(16.0) 8/24	(8.8) 9/24	4.0	R12	田瓶		
12	瓶壺器・杯	S K3155・1層	ロクロナギ、底部:へたり り?	ロクロナギ	(12.6) 1/24	(6.0) 10/24	4.3	R6	田瓶、底部にヘラガキ		
13	瓶壺器・杯	S K3155・1層	ロクロナギ、底部:へたり り?	ロクロナギ	14.3 8/24	6.6 24/24	4.4	R11	田瓶、内外両縁部に施釉付着		
14	瓶壺器・杯	S K3155・1層	ロクロナギ、底部:へたり り?	ロクロナギ	—	7.4 24/24	—	R161	田瓶		
15	瓶壺器・杯	S K3155・1層	ロクロナギ、底部:未切り	ロクロナギ	(14.0) 9/24	(8.4) 10/24	4.7	R3	V瓶、底部に施釉「匁」		
16	瓶壺器・杯	S K3155・2層	ロクロナギ、底部:へたり り?	ロクロナギ	—	(6) 5/24	—	R23	底部施釉「匁」		

第10図 S K3155出土遺物(1)



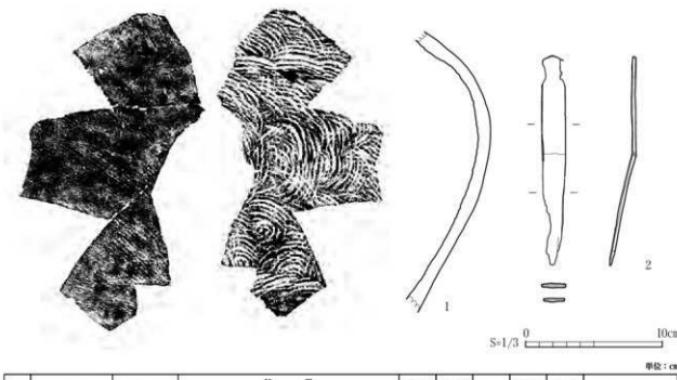
番号	種類	遺物・部位	特徴		口径 残存率	径 残存率	深 度	可 用 面 積	發 見 場 所	器 種 名	備 考
			外 面	内 面							
1	漆器蓋・長颈瓶	SK3155・1解	ロクロナデ、体部下半:手持 ヘラケズリ、底部:不明	ロクロナデ	—	10.4 21/24	—	—	R1		
2	漆器蓋・長颈瓶	SK3155・2解	ロクロナデ	ロクロナデ→絞り	—	—	—	—	R26	平城宮分館「漆匂」	
3	漆器蓋・壺	SK3155・1解	ロクロナデ、底部:へら切り	ロクロナデ	—	(8.0) 8/24	—	—	R165	田畠	
4	漆器蓋・壺	SK3155・1解	ロクロナデ、体部下半:手持 ヘラケズリ	ロクロナデ	(27.4) 2/24	—	—	—	R17		
5	漆器蓋・壺	SK3155・1解	ロクロナデ、浅縁・腹縫波状 文	ナデ	—	—	—	—	R44		
6	土師器・壺	SK3155・1解	体部下:ハケメ、底部:ムシ ロ状压痕	ナデ	—	(5.6) 11/24	—	—	R42		
7	土師器・壺	SK3155・1解	底部:ムシ状压痕	ナデ	—	(6.2) 9/24	—	—	R15		
8	土師器・壺	SK3155・2解	ロクロナデ、底部:回転切 り	ロクロナデ	—	(8.2) 12/24	—	—	R151	体部下端~底部:油糊付 着	
9	圓錐土器	SK3155・2解							R129		
10	圓錐土器	SK3155・2解							R134		
11	圓錐土器	SK3155・2解							R132		
12	圓錐土器	SK3155・2解							R136		

第11図 SK3155出土遺物（2）



第12図 SK3155出土遺物(3)

番号	種類	遺物・部位	特徴		口径 cm	底径 cm	残存率	器高 cm	写真版	登録番号	備考
			外面	内面							
1	瓶型器・甕	S K3155・2層	平行叩き→カキメ	当其瓶(青海波文)	(23.0) 5/24					R29	
2	瓶型器・甕	S K3155・2層	平行叩き	当其瓶(青海波文)	—					R21	
3	瓶型器・甕	S K3155・2層	平行叩き	当其瓶(青海波文)	(22.4) 12/24					R28	
4	瓶型器・甕	S K3155・2層	平行叩き	当其瓶(青海波文)	(25.6) 7/24					R30	



第13図 SK3155出土遺物(4)



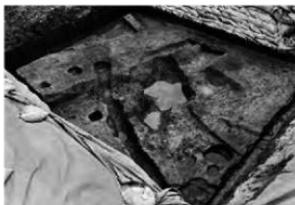
S K3155遺物出土状況 南より



第11図 1



第13図 2



調査区全景 南東より



第10図 5

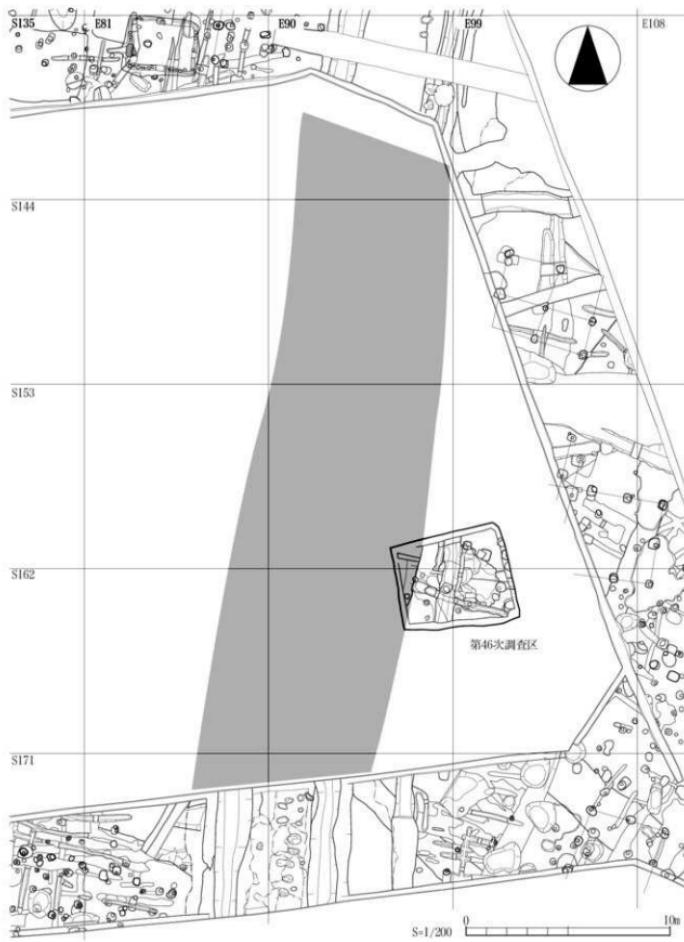


第10図 15



第10図 4

番号	種類	遺物・部位	特徴		口径 推定 現存半 径	底 径 推定半 径	高 さ	写 真 版	登 録 番 号	備 考
			外 面	内 面						
1	漆底器・盤	SK3155・2M	平行帯き・カキメ	当其底(青海波文)					R191	R29と同一企
2	漆串	SK3155・2M			共 S (14.3) cm 幅1.8cm 厚2.0-3mm				R1	木取り: 脈目



第14図 調査区と東1道路との位置関係

IV層との関係は不明であるが須恵系土器を含むS D3152・3153と、IV層より新しく須恵系土器を含むS X3150、S D3149・3151、S K3155・3156は10世紀前葉を上限とするものである。須恵系土器杯はほとんどが底部破片であり、編年の位置付けを明確にすらすことができないが、今回の調査で出土した土器の中には10世紀中葉頃に位置づけられる遺物が全く出土していないことを考慮するならば、10世紀前葉という範囲の中で捉えることが可能であろう。

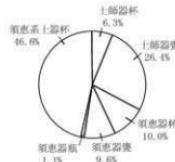
IV層との関係は不明であるが須恵系土器を含まないS B3146・3147、S X3158は、重複関係からみても10世紀前葉頃の遺構より古い。詳細な位置づけは困難であるが、S B3147は柱抜取り穴から須恵系土器が出土しており、その廃絶年代が10世紀前葉に近い可能性もある。

## (2) 遺構についての若干の考察

本調査区で発見した道路跡は、多賀城外の方格地割りを構成する道路網の一つ東1道路である。掘立柱建物、溝、土壤などの遺構は東1道路の東側にあり、基本的にそれと重複しないことから、本調査区は東1道路によって西側を区画された宅地の一部と考えられる。それらの遺構のうち、掘立柱建物は10世紀前葉以前、土器破片を含む溝や土壤は10世紀前葉以降の遺構であることから、本調査区の遺構は、掘立柱建物から溝・土壤へと変化しており、場の使われ方に変化があったことが判明した。

東1道路は東西大路東道路に近いところではそれと直交し、それより南側では南北大路と同じ方位をとると理解しているが、本調査区付近にその変換点があると推定できる。

土壤についてはS K3155から2,500点近い土器破片が出土している。破片は各層から出土しているが、層ごとに異なった傾向はみられず、接合しても完全な形に復元できたものはほとんどないことから、破片となった状態で本土壇に持ち込まれ、投棄されたと推定される。出土した土器の器種ごとの内訳は第15図のとおりである。須恵系土器杯の出土量が圧倒的に多いが、土器器甕の占める割合が比較的多く、口縁部破片88点のほとんどが別個体と見られる。須恵器甕は4個体確認できる。それらは胎土や叩きに使用した工具の原体の特徴から異なる生産地の製品と見られるが、頸部付近の直径が18~19cmであり、同容量の甕であった可能性がある。本土壇からは木製品として串が1点出土している。土器破片との厳密な層位的関係および平面的な位置関係は確認できなかったが、何らかの祭祀に関わる可能性を指摘しておきたい。



第15図 S X3155出土土器組成

## 4.まとめ

(1) 東1道路の東側に面した宅地の一部を調査した。

(2) 東1道路、掘立柱建物跡3棟、溝跡5条、土壤3基などを発見した。

(3) 本調査区の遺構は、10世紀前葉以前は掘立柱建物、10世紀前葉以降は土壤・溝と変化していることが判明した。

(注) 多賀城外の道路は、路面を低く掘り下げ、その両側に素掘りの側溝を作った形態が一般的である。したがって、路面上には堆積層が厚く堆積している場合が多い。

## VIII. 市川橋遺跡第48次調査

### 1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、市川橋遺跡城南地区における個人住宅建設に伴う発掘調査である。平成16年5月12日、地権者より当街区における住宅建築と埋蔵文化財の関わりについて協議書が提出された。建築計画では、基礎工事の際に細径の杭をほぼ全面に打ち込むRE-S-P工法を探るため、地下の構造への影響が懸念された。そのため発掘調査の実施を前提とした協議を行い、6月25日に地権者より発掘調査依頼書の提出を受け、本発掘調査の実施に至ったものである。

調査は7月20日より開始した。重機によって盛土の除去を行なった後、南北半部の東西約10m、南北約3mの範囲を深く掘り下げた。21日に現代の水田耕作土の下は全体が河川の埋土であることが判明し、22日には2時期の河川跡が上下に重複している状況を確認したが、湧水が著しく、掘り下げを断念した。23日に南・北壁の土層断面図を作成し、24日には光波測距器による平面図（縮尺1/40）作成、続いて全景写真撮影を行い、すべての調査を終了した。

### 2. 調査成果

本調査では河川跡を2条発見した。いずれの埋土も調査区全体におよんでおり、規模等は不明である。

#### S X3215河川跡

現代の水田耕作土の直下で発見した河川跡である。S X3216と重複しており、それより新しい。埋土は4層に区分され、いずれもグラウンドしている。1層は細砂が多く混入するオリーブ灰色砂層、2層は砂を含む黒色粘質土である。3層は貝を多く含む黒色粘質土と黒色砂質土、4層は黒色粘質土である。深さは約0.8mであり、底面の標高は-0.2mである。遺物は、底面付近からヒトの頭蓋骨が1点出土した(附章1)。

#### S X3216河川跡

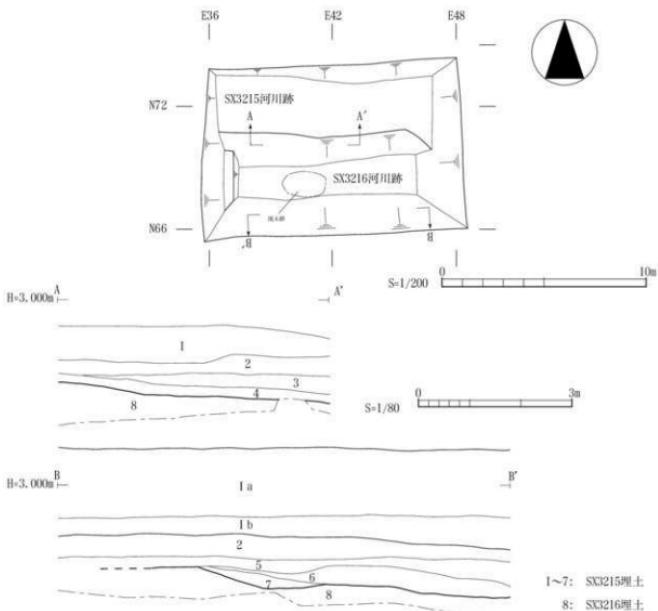
S X3215より古い河川跡である。底面までは掘り下げていない。埋土は灰白色の砂層であり、流木が多数見られる。遺物は、古代の土師器杯、須恵器壺の細片が数点出土した。

### 3.まとめ

- (1) 2条の河川跡を発見することを確認した。
- (2) 河川跡の年代は不明である。



第1図 調査区位置図



第2図 SX3215・3216河川跡 平面・断面図



調査区全景 北東より



S X3215流木出土状況 西より

## IX. 市川橋遺跡第50次調査

### 1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴う発掘調査である。平成16年7月、地権者より当該区における住宅建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画では、基礎工事の際に、直径20cm、長さ7.5mのコンクリート杭を打ち込むことから、地下の遺構への影響が懸念された。このため、本発掘調査の実施を前提とした協議を行った結果、9月10日、地権者より埋蔵文化財包蔵地に係る発掘調査についての依頼を受け、13日より調査を開始した。

調査は、住宅建築部分の表土（盛土）除去から取りかかった。調査面積と作業時の安全確保のため、表土をすべて場外搬出したことにより、対象面積の約7割の調査区を設定することができた。16日より遺構の検出作業を行い、炭化物が多量に混入する黒褐色土（III層）上面でS B3217掘立柱建物跡などを検出した。また、これと並行して調査区の周囲に排水溝を兼ねたサブトレーンチを設定し、調査区内の土層堆積状況を確認する。その結果、本地區には3時期の遺構面（III・IV・V層）があることが明らかとなった。21日、III層上面の遺構検出状況の写真撮影を行い、その後、調査区内に実測基準点を設置し、平面図の作成に取りかかる。22日より建物柱穴の断ち割り調査を実施し、10月1日、III層上面の調査を終了する。その後、III層除去及びIV層上面遺構の検出に取りかかり、10月4日よりS I 3226竪穴住居跡などの精査、埋土の掘り込み、平面図・断面図の作成を行う。7日、IV層上面での写真撮影を行い、翌日よりIV層除去及びV層上面の遺構検出を開始する。12日、調査区内の土層堆積状況を記録するため、東壁の断面図作成を行う。また、翌13日にかけて、V層上面で検出したS B3223掘立柱建物跡などの平面図・断面図の作成、写真撮影を行う。14日、図面の最終確認をするとともに、建物の延長線上での柱穴の有無の確認や土層観察用のベルトの除去、調査区及び調査対象範囲の模式図作成などを行う。15日、重機による調査区内の埋め戻しと、施工業者への現地引き渡しを行い、本調査的一切を終了した。

### 2. 調査成果

#### （1）層序

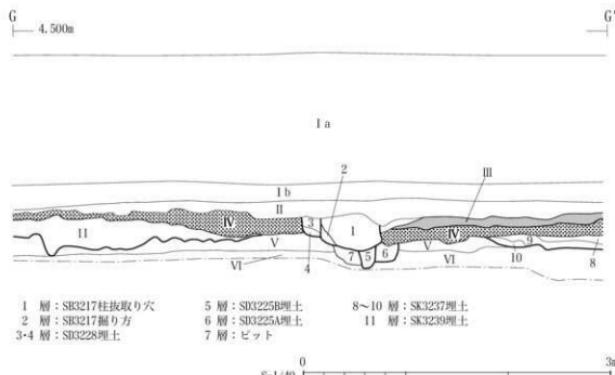
今回の調査区で確認した層序は、以下のとおりである

I a層：区画整理に伴う現代の盛土で、厚さは1.5mである。



第1図 調査区位置図

- I b層：現代の水田耕作土で、厚さは15～25cmである。
- II 層：灰白色火山灰や炭化物が斑状に混入する黒褐色粘質土で、厚さは5～20cm。調査区中央部に厚く堆積している。10世紀前葉以降の古代の堆積層。
- III 層：炭化物が斑状及び小ブロック状に多量に混入する黒褐色粘質土で、厚さは10～15cm。調査区中央～南西部に堆積している。上面は古代の遺構検出面である。
- IV 層：炭化物及びぶい黄橙色粘質土が斑状に僅かに混入する褐灰色粘質土で、厚さは4～25cm。調査区全域に堆積している。上面は古代の遺構検出面である。
- V 層：褐灰色粘質土が僅かに混入するぶい黄橙色粘質土で、厚さは6～20cm。上面は古代の最終遺構検出面（地山）である。
- VI 層：褐灰色粘質土が斑状に混入するぶい黄色砂層で、厚さは30cm以上。調査区全域に堆積している。



第2図 調査区東壁断面図

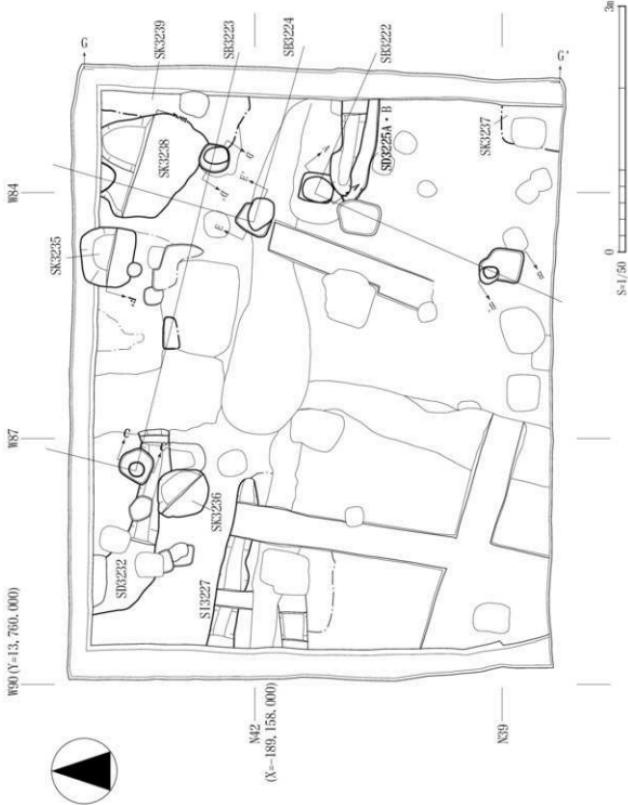
## (2) 発見遺構と遺物

### (V層上面検出遺構)

掘立柱建物跡、竪穴住居跡、溝跡、土壤を発見した。III・IV層上面検出遺構に破壊されているものが多く、残存状況は悪い。すべての遺構がV層に覆われている。

### S B3222掘立柱建物跡

調査区南東部で発見した掘立柱建物跡である。南北2間以上の柱列より推定したものであり、発見した柱穴は北西隅柱穴と西側柱列北より1間目柱穴であると考えられる。北西隅柱穴で柱抜取り穴、西側柱列北より1間目柱穴で柱痕跡を確認した。S D3225Aと重複し、それよりも古い。方向は、北で約25度東に偏しており、柱間は、西側柱列で約2.3mである。柱穴の平面形は方形を基調とし、規模は一边35～50cm、



第3図 V層上面検出遺構

深さ24~47cmである。埋土は、にぶい黄橙色粘質土がブロック状に混入する黒褐色砂質土である。柱痕跡は直径15cmであり、埋土は黒褐色粘質土である。遺物は、掘り方から土師器杯（B II c・B V類）・甕（B類）・壺、須恵器杯（I・III・V類）・甕が出土している。

#### S B3223掘立柱建物跡

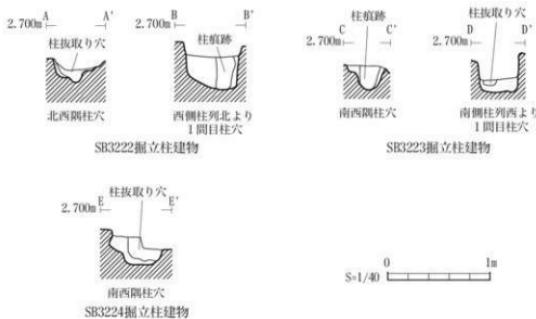
調査区北部で発見した掘立柱建物跡である。東西3間以上の柱列より推定したものであり、発見した柱穴は南西隅柱穴と南側柱列西より1間目柱穴・2間目柱穴であると考えられる。南西隅柱穴で柱痕跡、南側柱列西より2間目柱穴で柱抜取り穴を確認した。S D3232、S K3238と重複し、前者よりも古く、後者よりも新しい。方向は、西で約14度北に偏しており、柱間は、南側柱列で約3.9m（2間分）である。柱穴の平面形は概ね方形を基調とし、規模は一辺35~40cm、深さ24~38cmである。埋土は、にぶい黄橙色粘質土がブロック状に混入する褐灰色粘質土である。柱痕跡は直径20cmであり、埋土は暗灰黄色粘質土である。遺物は、掘り方から須恵器杯（V類）、柱抜取り穴から土師器杯（B類）・甕（A・B類）、須恵器杯・高台付杯・甕が出土している。このうち須恵器杯には、底部に墨書きされたものがある。

#### S B3224掘立柱建物跡

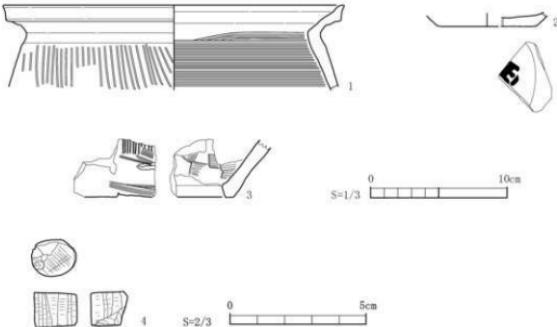
調査区北東隅で発見した掘立柱建物跡である。南北2間以上の柱列より推定した掘立柱建物跡であり、発見した柱穴は南西隅柱穴と西側柱列南より1間目柱穴であると考えられる。南西隅柱穴で柱抜取り穴を確認した。S K3238と重複し、これよりも古い。柱間は、西側柱列で約1.9mである。柱穴の平面形は方形を基調としており、規模は南西隅柱穴で測ると長辺45cm、短辺30cm、深さ34cmである。埋土は、にぶい黄橙色粘質土がブロック状に多量に混入するオリーブ黒色砂質土である。遺物は、掘り方から土師器甕（B類）が出土している。

#### S D3225溝跡

調査区東端部で発見した、長さ1.6m以上の東西溝跡である。S B3222と重複し、それよりも新しい。ほぼ同位置で、2時期の変遷を確認した。



第4図 V層上面柱穴断面図



単位: cm									
番号	種類	遺物・部位	特徴		口径 径 残存率	底 径 残存率	器高	費 用 料 金 額	備 考
			外 面	内 面					
1	土師器・甕 蓋り方	S3225 S3225	叩き。ロクロナデ	ロクロナデ、回転ハケメ	(25.0) 3/28		R25		日期
		S3225 S3225	ロクロナデ。底部:回転系切り	ロクロナデ		(7.0) 5/24	R32	V.M.、底部に墨書き	
3	土師器・甕 蓋り方	S3225 S3225	叩き。ナデ、手持ちハケズリ	ヘラナデ			R33		
		S3225A-1	非常に細かい叩き		直径: 1.7, 高さ: 1.3, 高さ: 1.3		R6	焼成窯 (本製品小)	
4	不明石製品	S3225A-1							

第5図 V層上面柱穴出土遺物

**S D3225A :** 方向は、西で約8度北に偏している。規模は、幅20cm以上、深さ18cmで、壁は垂直に立ち上がりっている。埋土は、にぶい黄橙色粘質土が斑状及び小ブロック状に多量に混入する褐灰色粘質土である。遺物は、円柱状の不明石製品（焼成窯）が出土している。

**S D3225B :** A期北辺に平行して確認できる。壁は北側が外に開き気味なのに対し、南側はほぼ垂直に立ち上がりっている。規模は上幅20~30cm、下幅14~16cm、深さ14~20cmである。埋土は、炭化物、にぶい黄橙色粘質土が混入する黒褐色粘土である。遺物は、須恵器杯、甕が出土している。

#### S I 3227竪穴住居跡

調査区西部で発見した竪穴住居跡である。残存状況は非常に悪く、北辺周溝及び貼床の一部を検出したのみである。規模は東西2.5m以上であり、方向は、西で約11度北に偏している。貼床は褐灰色粘質土であり、にぶい黄橙色粘質土がブロック状に多く混入している。床面上では、幅20~35cm、深さ4~10cmの周溝を確認している。断面はU字状を呈しており、底面は東から西に向かって傾斜している。埋土は、にぶい黄橙色粘質土が僅かに混入する褐灰色粘質土である。遺物は、土師器甕（A類）が出土している。

#### S K3235土壤

調査区北東部で発見した土壤である。平面形は方形であり、規模は長軸70cm、短軸65cm、深さ40cmである。断面形は概ねU字状を呈しており、壁は急に立ち上がりっている。埋土は3層に分けることができる（第6図4~5層）。4層は焼土・炭化物が多量に混入する暗オリーブ褐色土、5層は炭化物が小ブロック状

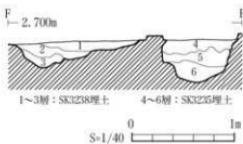
に混入する暗灰黄色砂質土、6層はにぶい黄橙色粘質土がブロック状に多量に混入する黒褐色砂質土である。遺物は、土師器杯（B類）・甕（A・B類）、須恵器杯（III類）が出土している。

#### S K3238土壤

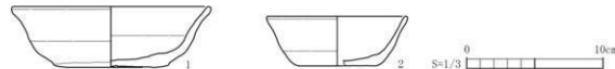
調査区北東部で発見した土壤である。平面形は不整形であり、規模は長軸1.9m、短軸1.2m、深さ24cmである。断面形は皿状を呈しており、壁は緩やかに立ち上がっている。埋土は3層に分けることができる（第6図1～3層）。上層（1・2層）は炭化物やにぶい黄橙色粘質土が僅かに混入する黒褐色粘質土、下層（3層）はにぶい黄橙色粘質土が僅かに混入する暗灰黄色粘質土である。遺物は、土師器杯（B類）・甕（B類）、須恵器杯（III類）、甕が出土している。

#### S K3237土壤

調査区南東隅で発見した土壤である。平面形は方形であり、規模は南北0.8m以上、東西0.8m、深さ14cmである。断面形は皿状を呈しており、壁は非常に緩やかに立ち上がっている。埋土は3層に分けることができる（第2図8～10層）。上層（8・9層）は、焼土・炭化物が多量に混入する黒褐色粘土であり、特に9層には炭化物が層状に堆積している。下層（10層）は、にぶい黄橙色粘質土が小ブロック状に多量に混入する黒褐色粘土である。遺物は、須恵器杯（III類）が出土している。



第6図 S K3235・3238断面図



第7図 S K3235・3237出土遺物

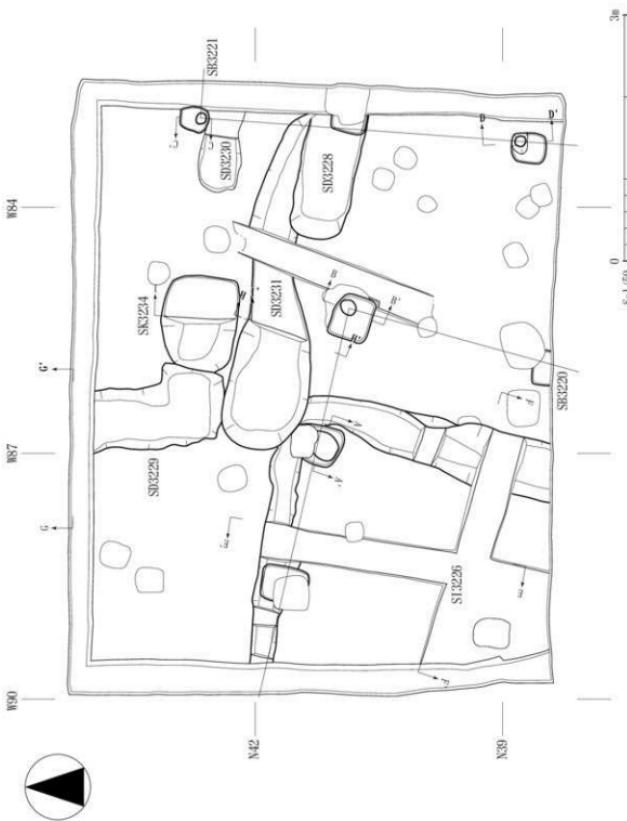
#### (IV層上面検出遺構)

掘立柱建物跡、竪穴住居跡、溝跡、土壙を発見した。北東部で発見したS D3230を除く全ての遺構が、III層に覆われている。

#### S B3220掘立柱建物跡

調査区南西部で発見した南北2間以上、東西3間以上の掘立柱建物跡である。北側柱列と東側柱列の一部を発見した。S I 3226と重複し、それよりも古い。柱穴は4基検出しており、北東隅柱穴と北側柱列東より1間目柱穴で柱抜取り穴を確認した。方向は、西で約13度北に偏しており、柱間は北側柱列でみると、西から約1.8m、約1.7mである。柱穴の平面形は方形を基調としており、規模は一辺45～55cm、深さ34～40cmである。埋土は、にぶい黄橙色粘質土が若干混入する黒褐色粘土である。なお、北東隅柱穴では、幅10cm、長さ20cm、厚さ4cmの礎板を確認した。遺物は、掘り方から土師器甕（B類）、須恵器杯（III類）・

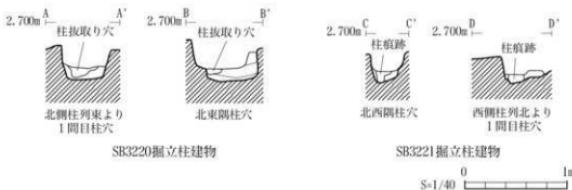
第8圖 IV層上面遺構平面圖



甕、製塙土器が出土している。

#### S B3221掘立柱建物跡

東壁際で発見した掘立柱建物跡である。南北2間以上の柱列より推定したものであり、発見した柱穴は北西隅柱穴と西側柱列北より1間目柱穴・2間目柱穴であると考えられる。北西隅柱穴と西側柱列北より2間目柱穴で柱痕跡を確認した。S D3228・3230と重複し、前者よりも古く、後者よりも新しい。方向は、北で約4度東に偏しており、柱間は北側柱列で3.70m（2間分）である。柱穴の平面形は方形を基調としており、規模は一辻30～45cm、深さ28cmである。埋土は、にぶい黄橙色粘質土がブロック状に混入する黒褐色砂質土である。柱痕跡は直径10～15cmである。遺物は、掘り方から土師器杯（B II類）・甕（B類）、須恵器杯（III・V類）、竈形土器が出土している。



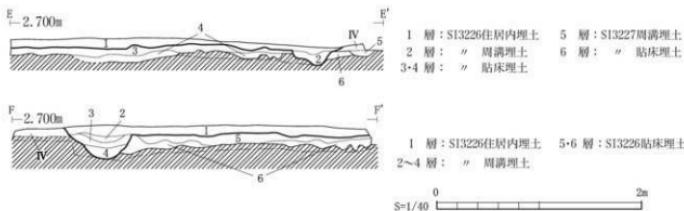
第9図 IV層上面柱穴断面図

#### S I 3226堅穴住居跡

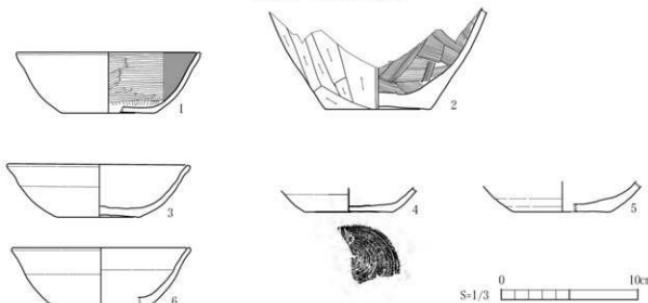
調査区南西部で発見した堅穴住居跡である。住居跡の北東部を検出したのみであり、それ以外は調査区外に延びている。S B3220と重複し、それよりも新しい。平面形は方形であり、規模は東西3.7m以上、南北3.6m以上である。方向は、北辺で見るとき西で約7度北に偏している。床面は、全面が褐色粘質土の貼床であり、にぶい黄橙色粘質土がブロック状に多く混入している。床面上では、上幅30～50cm、深さ14～25cmの周溝を確認している。断面はU字状を呈しており、底面は北から南に向かって傾斜している。埋土は、炭化物やにぶい黄橙色粘質土が斑状に混入する黒褐色粘土である。北辺では1層のみであるが、東辺中央部から調査区南壁にかけては3層に分けることができる（第10図下2～4層）。このうち3・4層にはにぶい黄橙色粘質土がブロック状に多量に混入しており、特に調査区南壁付近では、2・3層間に炭化物がレンズ状に堆積している。住居内埋土は1層確認できる。炭化物が斑状に多く混入する黒褐色粘質土であり、住居跡を覆う3層と近似している。遺物は、床面から土師器甕（B類）、須恵器杯（III類）、周溝から土師器杯（B II・B V類）、高台付杯、甕（A・B類）、須恵器杯（I b・I c・II・III・V類）、蓋・瓶・甕・丸瓦（II A類）、平瓦（II B類）、製塙土器、竈形土器が出土している。このうち、周溝から出土した土師器杯には漆が付着したものがある。

#### S D3228溝跡

調査区東端で発見した、長さ1.9m以上の東西溝跡である。S B3221、S D3231と重複し、それよりも新しい。方向は、東で約13度南に偏している。規模は、上幅65～70cm、下幅60～65cm、深さ20cmである。



第10図 S I 3226断面図



番号	種類	層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	資料 番号	備考
			外面	内面					
1	土師器・杯	周溝	ロクロナデ。底部:対縫系切り	ヘラミガキ。黒色処理	(13.4 13/24)	(6.8 7/24)	4.5	R3	BV類
2	土師器・甕	貼床埋土	手持ちラクケズリ	ヘラナデ		7.7 24/24		R4	
3	瓶型器・杯	I層	ロクロナデ。底部:へラ切り	ロクロナデ	(13.2 7/24)	6.0 24/24	3.9	R5	III類
4	瓶型器・杯	I層	ロクロナデ。底部:対縫系切り	ロクロナデ		(6.4 8/24)		R77	V類
5	瓶型器・杯	I層	ロクロナデ。底部:手持ちヘラ ケズリ	ロクロナデ		(7.2 4/24)		R81	III類
6	瓶型器・杯	I層	ロクロナデ。底部:手持ちヘラ ケズリ	ロクロナデ	(12.8 3/24)	(7.2 3/24)	4.2	R2	II類

第11図 S I 3226出土遺物

断面形はU字状であり、壁は垂直気味に立ち上がっている。埋土は2層に分けられる。上層は炭化物が混入する黒褐色粘土、下層にはぶい黄橙色粘質土が小ブロック状に多量に混入する褐灰色粘質土である。遺物は、土師器杯（B II・BV類）、甕（B類）、須恵器杯（III類）、甕、竈形土器が出土している。

#### S D3229溝跡

調査区北端部で発見した、長さ1.8m以上の南北溝跡である。S D3231、S K3234と重複し、前者よりも

新しく、後者よりも古い。方向は、北で約4度東に偏している。規模は、上幅75~80cm、下幅40~50cm、深さ38cmである。断面形は逆台形状であり、壁は急に立ち上がっている。埋土は2層に分けることができる。上層は焼土が多量に混入するオリーブ褐色砂質土、下層は炭化物が僅かに混入する黒褐色粘質土である。遺物は、土師器杯（B I・B II・B V類）・甕（B類）、須恵器杯（III・V類）・瓶・甕が出土している。

#### S D3231溝跡

調査区中央部で発見した、長さ約4.5mの東西溝跡である。S I 3226、S D3229・3228、S K3234と重複し、そのいずれよりも古い。方向は、東辺ではかると、西で約13度北に偏している。規模は、上幅50~100cm、下幅25~80cm、深さ13~24cmである。断面形は皿状であり、壁は緩やかに立ち上がりしている。埋土は2層に分けることができる。上層は、炭化物やにぶい黄橙色粘質土が斑状及び小ブロック状に多量に混入する褐灰色粘質土、下層はにぶい黄橙色粘質土が小ブロック状に多量に混入する黒褐色粘質土である。遺物は、土師器杯（B I・B II類）・甕（A・B類）、須恵器杯（III類）・瓶・甕、漆文書・丸瓦（II A類）平瓦（II B類）、土器片・製円板が出土している。このうち漆文書は4.5cm×3.5cmの断片である（第16図1、写真図版1-6）。1.2cm四方の文字が、オモテ面に二行確認することができる。

#### S K3234土壤

調査区北側で発見した土壤である。S D3229と重複し、それよりも新しい。平面形は隅丸方形であり、規模は東西1.2m、南北0.9m、深さ36cmである。断面形はU字状を呈しており、壁は南側ほど急に立ち上がっている。埋土は2層に分けることができる。上層は炭化物が多量に混入する黒褐色粘質土、下層はにぶい黄橙色粘質土が多量に混入するオリーブ褐色粘質土である。遺物は、土師器杯（B II・B V類）・甕（A・B類）、須恵器杯（III・V類）・甕が出土している。このうち須恵器には、内面が著しく摩耗したものがあり、硯として転用された可能性がある（第15図7）。

#### IV層出土遺物

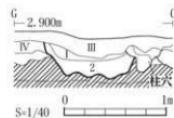
IV層からは、土師器杯（B V類）・甕（A・B類）、須恵器杯（II A・III類）・高台杯・瓶・甕・軒丸瓦（310）、平瓦（II B類）、丸瓦（II類）、製塙土器が出土している。土師器甕は大部分がB類であり、須恵器杯はほとんどがIII類で占められている。また、須恵器杯の転用硯がある（第17図4）。

#### （III層上面検出遺構）

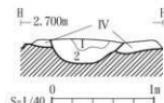
掘立柱建物跡、土壙、小柱穴がある。これらは、すべて10世紀前葉以降の古代に堆積したII層に覆われている。

#### S B3217掘立柱建物跡

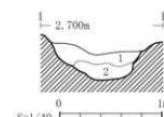
調査区南東部で発見した、南北2間以上、東西2間以上の掘立柱建物跡である。西側柱列と北側柱列の



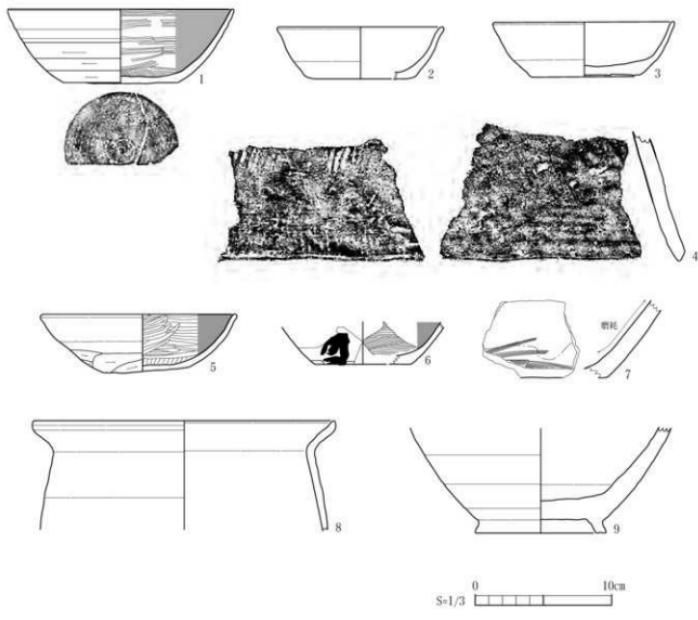
第12図 S D3229断面図



第13図 S D3231断面図



第14図 S K3234断面図

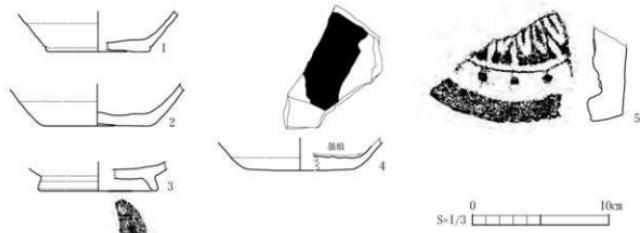


番号	種類	遺構・部位	特徴		口径 横存幅	底 横存幅	器高	費 目	記 号	備 考
			外 面	内 面						
1	土師器・杯	SK3228・1層	ロクロナデ、回転ヘラケズリ、 底部：回転ヘラケズリ	ヘラミガキ、黑色処理	(16.4) 7/24	8.4 13/24	5.5	R15	B1類	
2	土師器・杯	SK3228・1層	ロクロナデ、底部：へら切り	ロクロナデ	(12.0) 10/24	(6.6) 6/24	3.8	R24	III類	
3	土師器・杯	SK3228・1層	ロクロナデ、底部：へら切り	ロクロナデ	13.1 16/25	7.8 24/25	4.0	R23	III類	
4	壺形土器	SK3228・1層	叩き	ヘラナデ、ナデ				R20		
5	土師器・杯	SK3224・1層	ロクロナデ、手持ちヘラケズリ、 底部：手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ、黑色処理	14.0 12/24	6.4 24/24	4.2	R14	III類	
6	土師器・杯	SK3224・1層	ロクロナデ、底部：回転ヘラ 一手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ、黑色処理		(7.0) 4/24		R13	III類、体部に墨度	
7	土師器・甕	SK3224・1層	ヘラケズリ	ナデ、摩耗				R12	内面摩耗、転用範 か	
8	土師器・甕	SK3223・1層	ロクロナデ	ロクロナデ	(22.0) 3/24			R19		
9	土師器・甕	SK3223・1層	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	ロクロナデ	(9.6) 4/24			R16		

第15図 SD 3228ほか出土遺物



第16図 S D3231出土漆紙文書



第17図 IV層出土遺物

一部を発見した。柱穴は3基検出しており、そのすべてで炭化物が多量に混入する柱抜取り穴を確認した。方向は西側柱列でみると、北で約11度東に偏している。柱間は、西側柱列で約2.2m、北側柱列で約2.4mである。柱穴の平面形は方形を基調としており、規模は一辺50~60cm、深さ26~37cmである。埋土は、にぶい黄橙色粘土や褐灰色粘土が斑状及びブロック状に混入する黒褐色粘土である。なお、北西隅柱穴では、幅10cm、長さ20cm、厚さ4cmの礎板を確認した。遺物は、掘り方から土師器杯（B V類）・甕（B類）、須恵器杯（V類）・甕、製塙土器、柱抜取り穴から土師器杯（B II・V類）・甕（B類）、須恵器



第18圖 三層上面遺構平面圖

杯（V類）・瓶・甕、灰釉陶器瓶、土器片製円板、製塙土器、鉄滓が出土している。

#### S B3218掘立柱建物跡

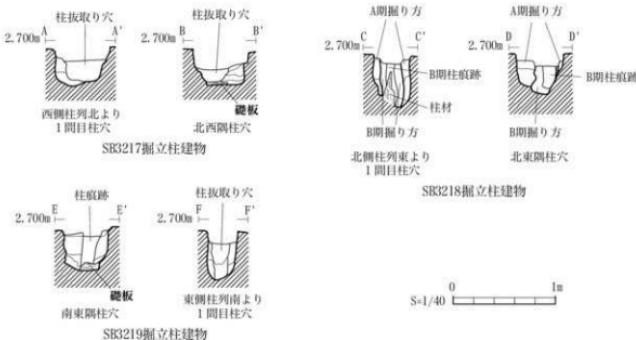
調査区南西部で発見した掘立柱建物跡である。東西1間以上の柱列より推定したものであり、発見した柱穴は北東隅柱穴と北側柱列東より1間目柱穴であると考えられる。各柱穴で2時期の変遷（A→B）を確認した。

**S B3218A：**柱穴の平面形は方形であり、規模は一辺35～45cm、深さ32～50である。埋土は、にぶい黄橙色粘質土や灰白色火山灰が斑状及び小ブロック状に混入する褐灰色粘質土である。遺物は、掘り方から土器飾（B類）が出土している。

**S B3218B：**掘り方は、A期の柱抜取り穴を兼用しており、そのすべてで柱痕跡を確認した。方向は西で6度55分北に偏しており、柱間は北側柱列で2.65mである。柱穴の平面形は不整形であり、規模は長径25～30cm、深さ40～52cmである。埋土は、にぶい黄橙色粘質土が斑状に多く混入する黒褐色粘質土である。柱痕跡は直径10～14cmの円形であり、埋土は黒褐色粘質土である。また、北側柱列東より1間目柱穴では直径12cmの柱材が残存していた。遺物は、掘り方から土器器杯（B I類）・甕（B類）、須恵器杯・甕、柱切取り穴から土器器杯（B類）・甕（B類）、須恵器杯・甕が出土している。

#### S B3219掘立柱建物跡

調査区北西部で発見した掘立柱建物跡である。南北2間以上の柱列より推定したものであり、発見した柱穴は南東隅柱穴と東側柱列南より1間目柱穴であると考えられる。南東隅柱穴で柱痕跡、東側柱列南より1間目柱穴で柱抜取り穴を確認した。方向は、北で約5度東に偏しており、柱間は、東側柱列で約1.8mである。柱穴の平面形は方形を基調としており、規模は南東隅柱穴で長辺45cm、短辺40cm、深さ43cmである。埋土は、にぶい黄橙色粘質土がブロック状に混入する黒褐色粘土である。南東隅柱穴の柱痕跡は直径15cmであり、埋土は黒褐色土である。また、幅15cm、長さ25cm、厚さ8cmの礎板を確認した。遺物は、掘り方から土器器杯（B V類）・甕（B類）、須恵器杯（II c・III・V類）・瓶・甕、製塙土器、柱抜取り穴か



第19図 III層上面柱穴断面図

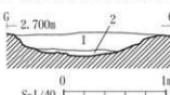


第20図 III層上面遺構出土遺物

ら土師器杯（B V類）・甕（A・B類）・須恵器杯・甕・柱切取り穴から土師器杯（B類）・甕・須恵器杯・甕が出土している。

#### S K3233土壤

調査区北側で発見した土壤である。平面形は東西にやや長い楕円形であり、規模は東西1.45m、南北1.2m、深さ24cmである。断面形は皿状を呈しており、壁は緩やかに立ち上がっている。埋土は2層に分けることができる。上層は炭化物が多量に混入する黒褐色粘質土、下層は炭化物が少量混入する灰黃褐色粘質土である。遺物は、土師器杯（B IIc・B V類）・高台付杯・甕（A・B類）・須恵器杯（V類）・蓋・瓶・甕・製塙土器が出土している。このうち、須恵器杯には、底部にヘラガキされたものがある（第20図6）。



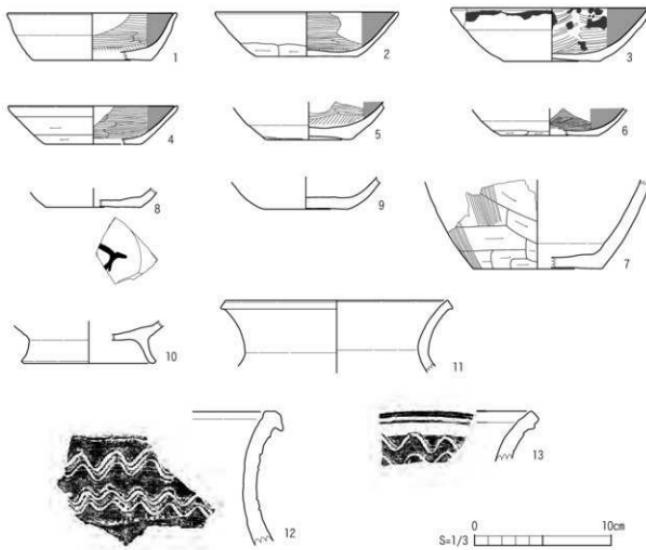
第21図 S K3233断面図

#### III層出土遺物

III層からは、土師器杯（B I・B IIc・B V類）・甕（B類）・須恵器杯（IIc・III・V類）・高台付杯・瓶・甕・平瓦、丸瓦（II類）、製塙土器、竈形土器が出土している。土師器杯では油煙が多量に付着したもの（第22図3）、須恵器杯では底部に墨書きされたもの（第22図8）がある。

### 3. 考察

今回の調査では、III・IV・V層上面で、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、溝跡、土壤などを発見した。ここでは、はじめに周辺地区との層序の整合性を図るため、南側に近接する第27次調査A11区（平成12年度調査）と本調査区との層序の対応関係を整理する。その後、遺構の変遷や年代について若干検討をしていきたい。



番号	種類	特徴		口径	底径	高さ	保存状況	目録番号	参考	単位:cm
		外面	内面							
1	土器・杯	ロクロナデ、底部:斜板系切り	ヘラミガキ、ロクロナデ	(12.4)	(8.6)	3.5	R38	B V類		
2	土器・杯	ロクロナデ、底部:手持ちヘラカズリ	ヘラミガキ、ロクロナデ	(13.4)	(7.4)	3.3	R40	B 日類		
3	土器・杯	ロクロナデ、底部:手持ちヘラカズリ	ヘラミガキ、ロクロナデ	(14.5)	7.1	3.9	R29	B 日類、内外面に黒帯付着		
4	土器・杯	ロクロナデ、底部:斜板ヘラカズリ	ヘラミガキ、ロクロナデ	(11.3)	(7.0)	2.8	R69	B I類		
5	土器・杯	ロクロナデ、底部:斜板系切り 一手持ちヘラカズリ	ヘラミガキ、ロクロナデ		6.0		R68	B II c類		
6	土器・杯	ロクロナデ、底部:手持ちヘラカズリ	ヘラミガキ、ロクロナデ		(7.2)		R75	B II類		
7	土器・壺	手持ちヘラカズリ、ナデ	ロクロナデ		(8.4)		R66			
8	土器・杯	ロクロナデ、底部:へら切り	ロクロナデ		(7.0)		R42	直腹、底部に黒帯		
9	土器・杯	ロクロナデ、底部:斜板系切り	ロクロナデ		(6.2)		R70	V類		
10	土器・高台付杯	ロクロナデ	ロクロナデ		(9.4)		R74			
11	土器・壺	ロクロナデ	ロクロナデ	(16.2)			R64			
12	土器・壺	ロクロナデ、波状文	ロクロナデ				R63			
13	土器・壺	ロクロナデ、波状文	ロクロナデ				R62			

第22図 III層出土遺物

### (1) AII区との層序関係

本調査区では、現代の盛土以下7枚の層序（I a～VI層：第2図）を確認した。このうち、II層に10世紀前葉に降下した灰白色火山灰が二次堆積しており、出土した遺物などから判断して概ね10世紀前葉以降の古代に堆積したものであると考えられる。遺構検出面となるのは、III・IV・V層である。それぞれの土色・土性・特徴をみると、III層は炭化物が多量に混入する黒褐色粘質土、IV層は炭化物及びにぶい黄橙色粘質土が混入する褐灰色粘質土、V層がにぶい黄橙色粘質土で古代の最終遺構検出面（地山）となっている。III層上面検出遺構に灰白色火山灰が混入する柱穴が若干認められるものの、いずれも層中に火山灰は混入していない。また、II層で確認できる須恵系土器も、III層以下では出土していない。

一方、南側に近接する第27次調査AII区では、東半部で5枚の層序（I～V層）を確認した。このうち、黒色土を主体とするIII層が灰白色火山灰降下以降の古代の堆積層であり、遺構検出面はその下層で確認したIV層（SX1715）及びV層上面である。それらの土色・土性・特徴についてみると、IV層は炭化物が混入する黒褐色・褐灰色粘質土が主体であり、V層は黄褐色砂質・粘質土を主体とした古代の最終遺構検出面（地山）である。また、V層上面には狭い範囲で整地層が存在しており、それぞれが遺構検出面となっている。本調査区に近い中央部ではII・III層は確認されていないものの、遺構検出面がIV層対応と考えられるSX1716及びV層上面、さらにSX1716とV層の間に狭い範囲で分布する各整地層上面となっている点では一致している。このうち、最も新しいSX1716については、上面検出遺構の埋土に灰白色火山灰が自然堆積するもの（SK1691土壤）が認められることから、10世紀前葉以前に形成されたものであることが明らかである。

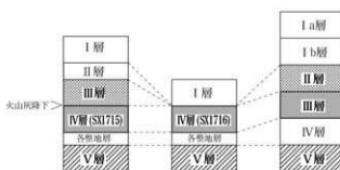
さて、上述した両調査区の層序関係を整理すると、以下のような共通性が認められる

- ① 本調査区とAII区東半部では、最も新しい遺構検出面が10世紀前葉以降の古代に堆積した黒褐色粘質土（本調査：II層、AII区：III層）に置かれている。
- ② AII区中央部で確認したSX1716は炭化物が多量に混入する特徴的な堆積層であり、この上面において灰白色火山灰降下前後の遺構が確認されていることから、本調査区で確認したIII層と同一の堆積層であると考えられる。
- ③ 遺構検出面については、にぶい黄橙色ないし黄褐色砂質・粘質土上面（地山）→整地層または褐灰色粘質土上面→10世紀前葉以前に堆積した黒褐色粘質土上面の3時期の変遷がある。

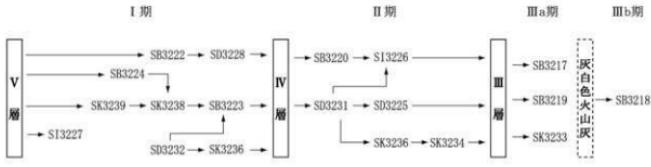
AII区中央部で10世紀前葉以降の古代の堆積層が確認できることなど、近接する場所で異なる点も指摘できるものの、①～③に認められる共通性より、両地区における層序については概ね整合していると判断できる。

### (2) 遺構の変遷と年代

発見した遺構は、堆積層及び各遺構の重複関係から、第24図のような新旧関係を捉えることができる。これを見ると、V層上面（Ⅰ期）→IV層上面（Ⅱ期）→III層上面（Ⅲ期）の3段階の時期区分が可能であり、III期では灰白色火山灰降下前後でIIIa→IIIb期に細分することができる。



第23図 層序対応関係模式図



第24図 遺構変遷図

一方、出土遺物をみると、全体的に少ないものの、III層及びS I 3226竪穴住居跡から比較的多くの土師器杯・甕、須恵器杯が出土している。

III層は本調査区で確認した最上層の遺構検出面であり、10世紀前葉以降に堆積したII層に覆われている。出土した遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕が主体であり、破片資料を含めた出土総数の比率は土師器：須恵器=70:30である。土師器杯は全てB類である。底部の切離し又は再調整が明らかなものでは、B I類が4点、B II類が11点、B V類が4点あり、8割近くのものが再調整を施している。全体の器形が明らかなものでは、底径／口径比が48～62、器高／口径比が24～27、外傾度が37～41の範囲内にある。土師器甕は破片総数で約300点出土しており、全てB類である。また僅かではあるが、部体に叩き成形痕を残すものや回転刷毛目を施すものも確認できる。須恵器杯では、II類7点、III類15点、V類9点が出土しており、III類が全体の5割程度を占めている。

S I 3226竪穴住居跡はIV層上面で検出している。床面及び周溝出土遺物が少ないものの、本住居が上述したIII層に直接覆われていることから、住居内埋土1層出土遺物も下限年代を示す上で有効な指標となり得ると判断し、これらを一括して検討する。出土した遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕が主体であり、破片資料を含めた出土総数の比率は土師器：須恵器=56:44である。土師器杯は全てB類である。底部の切離し又は再調整が明らかなものでは、B II類が9点、B V類が1点あり、再調整を施すものが多い。このうち周溝から出土した土師器杯B V類は、底径／口径比が51、器高／口径比が33、外傾度が28で、III層出土のものと比較すると、器高／口径比が高く、外傾度が小さい。土師器甕は破片総数で約110点出土しており、A類が1点含まれる以外は全てB類である。また、僅かではあるが部体に叩き成形痕を残すものも認められる。須恵器杯では、I類2点、II類1点、III類26点、V類2点が出土しており、III類が全体の8割以上を占めている。全体の器形が明らかなものでは、底径／口径比が45～56、器高指数が29～32、外傾度が34～38の範囲内にある。

本調査区周辺においてこれらと類似するものには、多賀城跡大畠S E2101B III層出土土器、同SK2167土壤出土土器があり、S E2101B III層出土土器が9世紀後半期頃(註1)、SK2167土壤土器が9世紀中葉頃(註2)の年代観が示されている。表1は、それら土器群とIII層及びS I 3226竪穴住居跡出土土器を、杯類の底部切離し技法や再調整の割合、底径／口径比、土師器と須恵器の破片総数の比率などで比較したものである。これをみると、S I 3226竪穴住居跡出土土器は、S E2101B III層出土土器と比べると、底径がやや小さくなる傾向が認められるものの、土師器杯に再調整を施すものや須恵器III類の占める割合、土師器と須恵器の破片総数の比率は近似している。一方、III層出土土器は、SK2167土壤出土土器と比べる

と須恵器杯V類の占める割合が低いものの、土師器杯に再調整を施すものや須恵器III類の占める割合、土師器と須恵器の破片総数の比率はほぼ一致している。したがって、S 13226堅穴住居跡出土土器は9世紀第2四半期頃、III層出土土器は9世紀中葉頃に収まるものと理解することができ、遺構の年代も概ねその頃であると考えられる。

	土 師 器			須 恵 器			土師器：須恵器 (点数)
	B I・II類	B V類	底径／口径	I・II類	III類	V類	
多賀城跡 S E2101B III層	94%	4%	33～57 (45～55中心)		86%	13%	44～64 (50～60中心) (94点：75点)
S 13226 堅穴住居跡	90% (9点)	10% (1点)	51	10.4% (3点)	82.7% (26点)	6.9% (2点)	45～56 (154点：119点)
III層	78.9% (15点)	21.1% (4点)	48～62	22.6% (7点)	48.4% (15点)	29% (9点)	70～30 (389点：170点)
多賀城跡 S K2167土壙	79% (98点)	21% (26点)	37～58	11.5% (11点)	45.8% (44点)	42.7% (41点)	43～55 (342点：116点)

表1 杯類の底部調整及び底径／口径比等比較一覧

一方、その他の遺構の年代については、出土遺物が少ないとことから、上述したIII層あるいはS 13226堅穴住居跡との新旧関係を中心に簡単に触れてみたい。

IV層は、S 13226堅穴住居跡の検出面であることから、それよりも古いことが明らかである。遺物をみると、土師器甕はA類が7点、B類が99点あり、ほとんどがB類である。須恵器杯ではIIa類が1点、III類が18点あり、底部が明らかなものはすべてIII類で占められている。土師器甕にA類が含まれる点や、須恵器杯にV類が確認されない点を考慮すると、S E2101B III層出土土器よりも古い様相が伺える。これと類似するものには、多賀城跡大烟S 12153・2160堅穴住居跡出土遺物があり、9世紀初頭～前葉頃(註3)の年代が示されている。したがって、IV層の年代もその頃と考えておきたい。

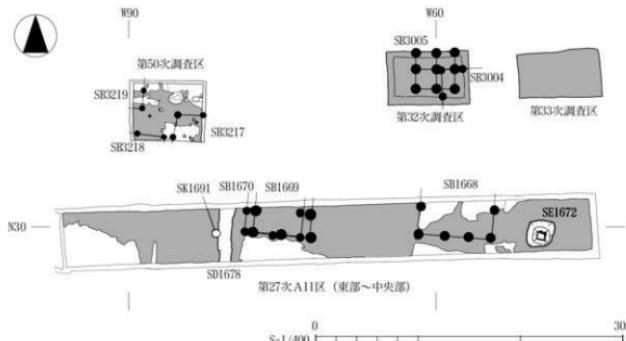
I期の遺構は、9世紀初頭～前葉頃としたIV層に覆われることから、それ以前の年代が与えられる。出土遺物をみると、ほとんどの遺構で土師器杯B類・甕B類が主体であることから、上限については8世紀後葉頃としておきたい。なお、S 13227堅穴住居跡では周溝埋土から土師器甕A類が1点出土しているが、破片資料であることや出土遺物がこの1点のみであることから、ここでは8世紀後葉以前の可能性があるということに止めておきたい。

II期の遺構は、IV層及びIII層の年代観より、9世紀前葉～中葉頃に位置すると考えられる。

III期の遺構は、III層及びII層の年代観より9世紀中葉頃を上限とした古代とすることができる。このうち、IIIb期のS B3218掘立柱建物跡では、古い方のA期掘立柱埋土に10世紀前葉に降下した灰白色火山灰ブロックが混入していることから、それ以降の年代が与えられる。IIIa期の遺構は、埋土中に灰白色火山灰が認められないこと、須恵系土器が出土していないことから、ここでは概ね9世紀後半のなかで収まるものとしておきたい。

#### 4.まとめ

- (1) 今回の調査で発見した遺構は、Ⅰ～Ⅲ期の3段階の時期区分を設定することができた。これらの年代はⅠ期：8世紀後葉～9世紀前葉頃、Ⅱ期：9世紀前葉～中葉頃、Ⅲa期：9世紀中葉～後半頃、Ⅲb期：10世紀前葉以降の古代である。
- (2) 今回設定した時期区分のうち、Ⅱ期とⅢ期の間に黒褐色粘質土（Ⅲ層）が自然堆積しており、出土遺物より9世紀中葉頃の堆積と位置付けた。この層は、近接する第27次調査AII区をはじめ比較的広範囲で確認しており（第27次調査：Ⅳ層）、本地区周辺の遺構期を設定する上での指標となる可能性がある。AII区では層中及びこれを前後する遺構から多くの遺物が出土していることから、今後これらを総合的に整理することにより、さらに詳細な形成時期が明らかになると考えられる。



第25図 周辺遺構模式図（Ⅲ層上面）

（註1）宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1994』1995

（註2）宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1992』1993

（註3）宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1992』1993

#### 【引用・参考文献】

宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1991』1992

宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1992』1993

宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1994』1995

多賀城市教育委員会『矢作ヶ淵跡はか』多賀城市文化財調査報告書第71集 2003

多賀城市教育委員会『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書III－』多賀城市文化財調査報告書第75集 2004

村田晃一「土器から見た官衙の終末」『古代官衙の終末をめぐる諸問題』第3回東日本埋蔵文化財研究会資料1994



調査区全景 西より



1



2



3



4



5



6

- 1 上師器・杯（第15図5、R14）  
S K3234・I層出土
- 2 須恵器・杯（第15図3、R23）  
S D3228・I層出土
- 3 上師器・杯（第22図3、R39）  
III層出土
- 4 須恵器・杯（第11図3、R5）  
S I3229・I層出土
- 5 不明石製品（第5図4、R6）  
S D3225A・I層出土
- 6 漆器文書（第16図1、R97）  
S D3231・I層出土

出土遺物

## X. 市川橋遺跡第51次調査

### 1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、市川橋遺跡城南地区における個人住宅建設に伴う発掘調査である。平成16年8月23日、地権者より住宅建築と埋蔵文化財との関わりについて協議書が提出された。建築計画では、基礎工事の際に直径114.3mm、長さ10.5mの鋼管杭を打ち込むことから地下の構造への影響が懸念された。そのため発掘調査の実施を前提とした協議を行い、平成16年9月22日に依頼書の提出を受け、本発掘調査の実施に至ったものである。

調査は10月12日より開始した。重機によって表土を除去し（～13日）、調査区が狭いため場外搬出とした。13日に排水溝を掘削して湧水を備え、14日には重機で除去できなかつたⅡ・Ⅲ層を人力で除去する。15日に黄褐色砂質土上面（後にSX3241と判明）でSX3240河川跡を発見し、18日にその検出状況を写真撮影した後、埋土を掘り下げる（～25日）。20日は台風のため作業中止となったが、21日にレベルを移動し、22日に東壁の土層断面図を作成した。25日にはSX3240の底面よりさらに下層から古墳時代の土師器壺が出土し、基盤層とみていたものが古墳時代の河川跡あるいはそれを覆う堆積層であることが判明した。26日に西壁の土層断面図を作成し、並行して光波測距器による調査区外周の実測（縮尺100分の1）を行った。27日にSX3240河川跡の平面図（縮尺20分の1）を作成し、土層堆積状況の検討を行ってすべての調査を終了した。

### 2. 調査成果

#### （1）層序

- I a層：区画整理に伴う盛土。厚さ約2.5m。
- I b層：現代の水田耕作土。厚さ30～40cm。
- II 層：灰色粘土。厚さ25～35cm。
- III 層：黒褐色粘質土。古代の河川跡を直接覆っている。厚さ約30cm。
- IV 層：黄褐色砂質土。SX3241の埋土あるいはそれを覆う堆積層。

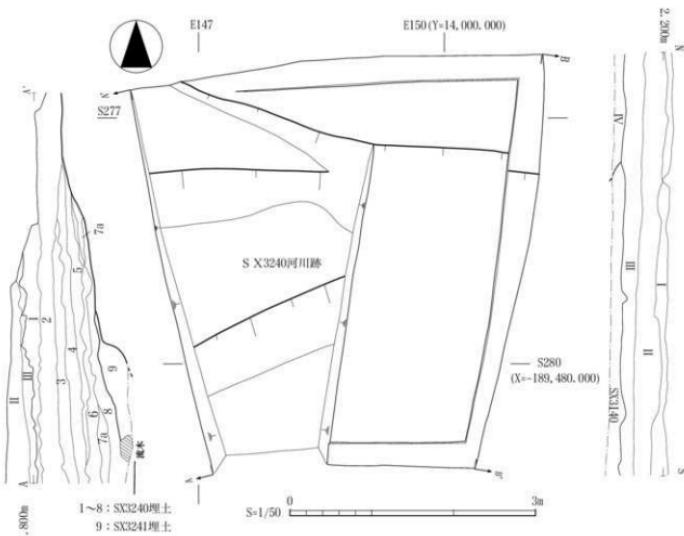
#### （2）発見遺構と遺物

##### SX3240河川跡

調査区北壁の南側2.5m付近を北壁とする東西方向の河川跡である。第IV層上面で検出し、第III層によって覆われている。深さは検出面（標高約1.7m）から約1.1mである。埋土は9層に区分され、1層の暗灰黄色砂質土には灰白色火山灰小ブロックが多く混入している。2～4層は黒褐色砂質土、5・8層は灰オ



第1図 調査区位置図



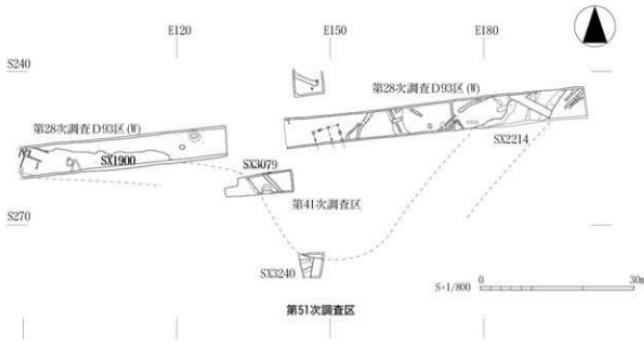
第3図 SX3240・3241河川跡平面図・断面図

リーブ粘質土ブロックを多量に含むオリーブ黒色粘質土、6・7層は亜泥炭ブロックを多量に含む黒色粘質土である。



番号	種類	遺構・層位	特徴		口径	既存床	既存壁	器高	写真版	登録号	備考
			外面	内面							
I	土器部・微	埋土	ハケメルハラケズリ	ナダ		2.6 24/24			R1		

第2図 S X3241出土遺物



第4図 V層上面柱穴断面図

#### S X3241河川跡

S X3240の下層で発見した河川跡である。その一部を掘り下げて確認したにすぎず、詳細は不明である。古墳時代中期の土師器壺（第2図）が1点出土しており、その時期の遺構と考えられる。

### 3.まとめ

- (1) 古墳時代中期と古代の河川跡を発見した。
- (2) S X3240は第28次調査区のS X2214、第41次調査区のS X3079と一連の河川と考えられる。年代は10世紀前葉以前である。



調査区全景 南東より



土師器壺

## 附章1 市川橋遺跡第48次調査出土の古代人骨

瀧川 涉・百々 幸雄  
東北大学大学院医学系研究科人体構造学分野

### 1.はじめに

多賀城市市川橋遺跡における古代の河床跡からは、1993年と1998～2001年の調査で複数個体の人骨が検出されており、その詳細については既に報告済みである（澤田・川久保・百々 2004）。その後、2004年の第48次調査でも、1個体分の古代人骨が検出された。本稿はその解剖学的・形態人類学的報告である。

人骨の計測はMartinの方法（馬場1991）に準拠し、計測値を表1にまとめた。また、頭蓋の形態小変異の出現状況を表2に記載した。

### 2. 遺存状況

頭蓋1点のみが確認されている（写真1）。脳頭蓋では右側頭部から底部にかけての領域が失われ、蝶形骨もトルコ鞍の一部が認められる他は破損している。頭蓋冠の右半分と後頭骨の表面は、風化によりところどころ板間層が露出する。顔面頭蓋は、前頭部の左眼窩外側に頬骨が伴う以外は、ほとんどの領域を欠損する。鼻骨も残されていないが、前頭骨の鼻根部周辺は観察可能である。また、上・下顎とともに確認されていないため、歯の萌出状況も明らかではない。

### 3. 年齢推定

頭蓋の全体的なサイズが小さく、冠状・矢状・ラムダ縫合とも全く閉鎖していないため、未成年と考えられる。歯槽も歯も遺存していないので、その具体的な年齢を絞り込むことは困難であるが、少なくとも前頭縫合が完全に閉鎖していることから、5～6歳未満の幼児ではなく、少年期（～15歳前後）に該当するものと判断される。

### 4. 性別判定

年齢推定により少年期に属すると考えられるため、形態からの性別判定は困難である。しかし少年期であったとしても、ある程度成熟が進行した年齢段階、すなわち春期に至っていたのであれば、丸みを帯びて立ち上がった前額部や、小さく内反した乳様突起、発達の弱い乳突上稜、後頭部の筋付着部の滑らかさ等から判断して、女性の可能性もある。

### 5. 形態学的特徴

脳頭蓋の上面觀は卵円形を呈する。頭蓋長幅示数は70.9となり、長頭（示数70.0～74.9）に分類される。後面觀は五角形に近いがやや歪んでいる。バジオン・ブレグマ高は計測できなかつたが、頭蓋最大長や頭蓋最大幅に対して脳頭蓋の高さが占める割合がやや大きい印象がある。冠状縫合は単純で、出土時に前頭骨と頭頂骨が分離していたのに対し、矢状およびラムダ縫合は複雑に入り組んだ様相を呈する。側頭線や

後頭部の上項線、外後頭隆起はあまり発達しておらず、不明瞭である。前頭結節は、少なくとも左側でわずかに張り出した状況が確認される。

顔面頭蓋では、左の眼窩上縁付近で、前頭骨から頬骨に移行する領域の輪郭が、緩やかなカーブを描く。その一方、鼻根部では鼻骨を欠くものの、ナジオンの陷凹と鼻棘の前方への鋭い突出が見られることから、かなり高い鼻を持っていた可能性がある。しかし、計測点のほとんどが失われているため、具体的な数値として鼻骨平坦度示数を求ることはできなかった。

## 6.まとめ

市川橋遺跡の第48次調査で出土した人骨は、頭蓋1個体分のみが確認され、年齢は少年期に該当するものと推測されるが、性別については断定できない。

この人骨の顔面頭蓋は長頭に分類されたが、以前に同遺跡の河床跡から出土した平安時代（10～11世紀）に該当する頭蓋には、長頭の個体は認められていない（瀧川・百々2001、澤田・川久保・百々2004）。中世には長頭の個体が増加することが関東や西日本でも指摘されているが（鈴木他1956、中橋・永井1985）、東北地方におけるこの時期の様相には不明な点も多く、平安時代に該当する古人骨の標本数も決して十分なものではない。古墳時代から中世にかけての間隙を埋める時期の人骨資料の増加が望まれる。

また、今回の出土人骨は、眼窩上縁外側の輪郭が滑らかな弧を描く一方で、その鼻根部には若干の陷凹が見られ、鼻骨が突出していた可能性が高い。今までに当遺跡や山王遺跡（近藤・百々1997）から出土した古代人骨には前者の特徴が共通しているものの、鼻骨が平坦である点が異なっている。突出した鼻骨は繩文人骨によく認められる形質であるが、外側で円弧を描く眼窩上縁は東日本では古墳時代以降に頻出する。すなわち、今回の出土人骨の顔面形態は、繩文的な高い鼻と、古墳人以後に多く見られる眼窓の両者を兼ね備えていることが指摘されるのであるが、その系統的背景に興味が持たれるところである。

## 参考文献

- 馬場悠男（1991）人体計測法—II人骨計測法、「人類学講座」別巻I 雄山閣
- 近藤修・百々幸雄（1997）山王遺跡多賀城前地区出土人骨、宮城県文化財調査報告書第171集「山王遺跡IV—多賀前地区考察編」宮城県教育委員会・建設省東北地方建設局 pp.158-168.
- 中橋孝博・永井昌文（1985）人骨、「古母浜遺跡」下関市教育委員会 pp.154-225.
- 澤田純明・川久保善智・百々幸雄（2004）市川橋遺跡出土人骨、多賀城市文化財調査報告書第75集「市川橋遺跡一城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅳ」多賀城市教育委員会・多賀城市城南土地区画整理組合 pp.58-68.
- 鈴木尚・林都志夫・田邊義一・佐倉朝（1956）頭骨の形質、日本人類学会編「鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨」岩波書店 pp.75-148.
- 瀧川涉・百々幸雄（2001）多賀城市市川橋遺跡出土の古代人骨について、宮城県文化財調査報告書第184集「市川橋遺跡の調査—県道『泉一塩釜線』関連調査報告書Ⅳ」宮城県教育委員会・宮城県土木部 pp.297-303.

表1 頭蓋計測値・示数

計測項目・示数	計測値
1. 頭蓋最大長	172
1d. ナジオン頭蓋長	(166)
8. 頭蓋最大幅	122
10. 最大前頸幅	(99)
25. 正中矢状弧長	350
26. 正中前頸弧長	117
27. 正中頭頸弧長	118
28. 正中後頸弧長	117
29. 正中前頸弦長	(97)
30. 正中頭頸弦長	107
31. 正中後頸弦長	94
51. 眼窩幅	31 (左)
8/1. 頭蓋長幅示数	70.9
27/26. 矢状前頭頸頂示数	100.9
29/26. 矢状前頭頸弯曲示数	82.9
30/27. 矢状頭頸弯曲示数	90.7
31/28. 矢状後頸弯曲示数	80.3

番号はMartinの計測項目番号を示す。

表2 頭蓋形態小変異

観察項目	rt.	lt.
1. 前頭縫合	-	-
2. 眼窩上神経溝	/	-
3. 眼窩上孔	/	-
4. ラムダ小骨	-	-
5. ラムダ縫合骨	-	-
6. 横後頭縫合痕跡	-	-
7. アステリオン小骨	/	-
8. 後頭乳突骨	/	-
9. 頭頂切痕骨	/	-
10. 離管	/	+
11. 舌下神經管二分	/	-
12. フシケル孔	/	+
13. 卵円孔形成不全	/	-
14. 翼棘孔	/	-
15. 横頸骨縫合痕跡	/	-
16. 頸靜脈孔二分	/	-
17. 上矢状制溝左折	-	-

+ : 有 - : 無 / : 欠損により不明



写真1 市川橋遺跡第48次調査出土人骨の頭蓋(A:正面、B:左側面、C:後面、D:上面、E:下面)

## 附章2 多賀城市新田遺跡第29・30次調査のプラント・オパール分析

株式会社古環境研究所

### 1.はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 ( $\text{SiO}_4$ ) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとでガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壤中に永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生、古環境の推定などに応用されている（杉山、2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原、杉山、1984）。

新田遺跡第29次発掘調査では、古墳時代前期とされる堆積層より小区域の水田跡が検出された。そこで当該遺跡における稲作を検証する目的でプラント・オパール分析を行うことになった。また、第30次調査においても稲作跡の可能性を検討するためにプラント・オパール分析を行った。

### 2. 試料

分析試料は、第29次調査ではVI層上部とVI層下部の2点、第30次調査ではIX層、X層、XI層の3点である。なお、第29次調査のVI層は古墳時代前期、第30次調査のIX層、X層、XI層は中世以前の堆積層である。

### 3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、ガラスピーズ法（藤原、1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105°Cで24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1 gに対し直径約30mmのガラスピーズを約0.02 g 添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550°C・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42kHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20μm以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機能細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料1 g中のプラント・オパール個数（試料1 gあたりのガラスピーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機能細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： $10^{-5} \text{ g}$ ）を乗じて、

単位面積で厚層1 cmあたりの植物体生産量を算出した。イネの換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、ネササ節（ネササ節型、クマザサ属（チマザサ節・チマキサ節）は0.48、クマザサ属（チマザサ節・チマキサ節）は0.75である（杉山、2000）。

### 4. 分析結果

分析試料から検出されたプラント・オパールは、イネ、ヨシ属、ススキ属型、タケ種類（ネササ節型、クマザサ節型、その他）および未分類である。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1と図1に示す。主要な分類群については顕微鏡写真を示す。以下に、各調査地におけるプラント・オパールの検出状況を記す。

#### （1）第29次調査

第29次調査では、VI層の上部と下部について分析を行った。イネは両試料より高い密度で検出されている。ヨシ属、ススキ属型、ネササ節型およびクマザサ属型も両試料で検出されている。このうち、ヨシ属は上部で非常に高い密度である。ススキ属型は上部で比較的高い密度である。ネササ節型はいずれもやや低い密度であるが、クマザサ属型はいずれも比較的高い密度である。

#### （2）第30次調査

第30次調査では、IX層、X層、XI層について分析を行った。イネはすべての試料において比較的高い密度で検出されている。ヨシ属、ススキ属型、ネササ節型およびクマザサ属型もすべての試料で検出されている。このうち、ヨシ属はXI層で比較的高い密度であり、ススキ属型はIX層で高い密度である。

#### 5. 寄考

##### （1）新田遺跡第29次調査における稲作

第29次調査では、古墳時代前期とされる第VI層より小区域の水田跡が検出されている。当該層の上部と下部において分析を行った結果、両者からイネのプラント・オパールが高い密度で検出された。それぞれのプラント・オパール密度は、前者が4,400個/g、後者が4,900個/gであり、いずれも稲作跡の可能性を判断する際の基準とされる3,000個/gを超過している。したがって、第VI層で検出された水田構造はプラント・オパール分析のうえからも稲作跡であると判断される。

なお、VI層上部ではヨシ属が高い密度で検出されている。このことから、当該層堆積時の調査地周辺は湿地であったか、VI層水田が廃絶された後湿地となった可能性が考えられる。また、ススキ属型も高い密度で検出されているが、上述のように湿地の環境が示唆されることから、ここで検出され

たものは湿地を好むオギである可能性が考えられる。

## (2) 新田遺跡第30次調査における種作

第30次調査では、いずれも中世以前の堆積層とされるIX層、X層およびXI層について分析を行った。その結果、これら3層すべてからイネのプラント・オパールが高い密度で検出された。プラント・オパール密度は、IX層で3,000個/g、X層で3,800個/g、XI層で2,900個/gと各々稻作跡の可能性を判断する際の基準値である3,000個/g以上もしくはそれに匹敵する値である。こうしたことから、これら各層では調査地あるいは附近において稻作が行われていた可能性が考えられる。

なお、XI層ではヨシ属が比較的高い密度で検出されている

ことから、当該層では湿地を開いて水田が造成されたか、もしくは堆積時の調査地周辺は湿地の環境であったことが推定される。

## 文献

杉山真二 (2000) 植物珪酸体 (プラント・オパール)。考古学と植物学。同成社, p. 189-213。

藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) 一数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法。考古学と自然科学, 9, p. 15-29。

藤原宏志・杉山真二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (5) プラント・オパール分析による水田址の探査一。考古学と自然科学, 17, p. 73-85。

検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群 (和名・学名) \ 試料	29次調査			30次調査		
	VIII上	VIII下	IX	X	XI	
イネ科	Gramineae (Grasses)					
イネ	<i>Oryza sativa (domestic rice)</i>	44	49	39	38	29
コシヒカリ	<i>Pongamia (red)</i>	10	29	4	2	2
ススキ属	<i>Miscanthus sp.</i>	44	20	41	15	20
タケモ科	Bambusoideae (Bamboo)					
キモササ属	<i>Pleioblastus ex. Neesa type</i>	32	30	30	29	29
クマザサ属	<i>Pleioblastus except Miyakusaka type</i>	120	20	33	30	30
その他	Others	39	20	29	46	19
未分類等	Unknown	333	217	223	167	176
プラント・オパール総数		733	483	425	334	303

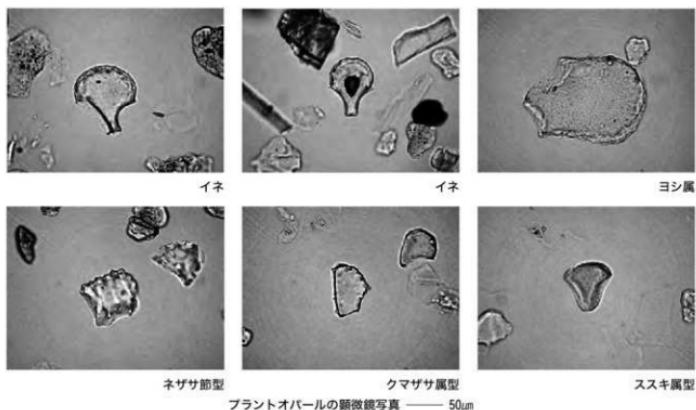
表1 多賀城市新田遺跡のプラント・オパール分析結果



第1図 新田遺跡第29次調査のプラント・オパール分析結果



第2図 新田遺跡第30次調査のプラント・オパール分析結果



## 報告書抄録

ふりがな	たがじょうしないのいせきに
書名	多賀城市内の遺跡2
副書名	平成16年度発掘調査報告書
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第78集
編著者名	石川俊英 相澤清利 鈴木孝行 千葉孝弥 村松 稔 武田健市
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター
所在地	〒985-0873 宮城県多賀城市中央二丁目27番1号 TEL 022-368-0134
発行年月日	西暦2005年3月28日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
高崎遺跡 第44次調査	多賀城市 高崎二丁目 99-2・5	042099	18018	38度 17分 33秒	140度 59分 47秒	20040408 ～ 20040419	21m <sup>2</sup>	個人住宅建設
新田遺跡 第27次調査	多賀城市 新田字北 164-2	042099	18012	38度 17分 35秒	140度 57分 55秒	20040408 ～ 20040430	40m <sup>2</sup>	個人住宅建設
新田遺跡 第28次調査	多賀城市 新田字北 29-1の一部・30-4	042099	18012	38度 17分 40秒	140度 58分 04秒	20040507 ～ 20040525	32m <sup>2</sup>	個人住宅建設
新田遺跡 第29次調査	多賀城市 新田字西 31-3・4	042099	18012	38度 17分 39秒	140度 58分 04秒	20040817 ～ 20040908	61m <sup>2</sup>	個人住宅建設
新田遺跡 第30次調査	多賀城市 新田字北2-9・13	042099	18012	38度 17分 28秒	140度 59分 46秒	20041007 ～ 20041018	53m <sup>2</sup>	個人住宅建設
市川橋遺跡 第44次調査	多賀城市 城南二丁目 20-23	042099	18008	38度 17分 29秒	140度 59分 37秒	20040506 ～ 20040513	22.5m <sup>2</sup>	個人住宅建設
市川橋遺跡 第46次調査	多賀城市 城南二丁目 5-11	042099	18008	38度 17分 38秒	140度 59分 33秒	20040614 ～ 20040630	25m <sup>2</sup>	個人住宅建設
市川橋遺跡 第48次調査	多賀城市 城南一丁目 10-34	042099	18008	38度 17分 45秒	140度 59分 30秒	20040720 ～ 20040726	103m <sup>2</sup>	個人住宅建設

市川橋遺跡 第50次調査	多賀城市 城南一丁目 5-16	042099	18008	38度 17分 44秒	140度 59分 26秒	20040913 ～ 20041015	44m <sup>2</sup>	個人住宅 建設
市川橋遺跡 第51次調査	多賀城市 城南二丁目 17-32	042099	18008	38度 17分 34秒	140度 59分 36秒	20041012 ～ 20041027	21m <sup>2</sup>	個人住宅 建設
所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
高崎遺跡 第44次調査	集落・都市 城館	古代・中世	溝・土壌	土師器・平瓦				
新田遺跡 第27次調査	集落・屋敷	古代・中世	掘立柱建物跡・ 柱列・溝	中世陶器・染付磁 器・錢貨			中世の屋敷を発見	
新田遺跡 第28次調査	集落・屋敷	古代・中世	溝	中世陶器・瓦質土 器・下駄・漆器			中世の屋敷の区画 溝を発見	
新田遺跡 第29次調査	集落・屋敷	古代・中世	水田・溝				中世の屋敷の区画 溝を発見	
新田遺跡 第30次調査	集落・屋敷	古墳	水田				古墳時代の水田耕 作土を発見	
市川橋遺跡 第44次調査	集落・都市	奈良・平安	溝・土壌	土師器甕				
市川橋遺跡 第46次調査	集落・都市	奈良・平安	道路跡・掘立柱 建物・溝・土壌	須恵系土器・須恵 器・土師器・墨書き 土器・斎串			東1道路を発見	
市川橋遺跡 第48次調査	集落・都市	奈良・平安	古代の河川	土師器・須恵器・ 人骨			古代の河川跡を発 見	
市川橋遺跡 第50次調査	集落・都市	奈良・平安	掘立柱建物・堅 穴住居・溝等	須恵器・土師器・ 漆紙文書・墨書き 土器・琥珀			古代の堅穴住居跡 などを発見	
市川橋遺跡 第51次調査	集落・都市	古墳～平安	古墳～古代にか けての河川	土師器壺			古墳～古代にかけ ての河川跡を発見	

---

多賀城市文化財調査報告書第78集

多賀城市内の遺跡2

平成17年3月28日発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター

多賀城市中央二丁目27番1号

電話 (022) 368-0134

発行 多賀城市教育委員会

多賀城市中央二丁目1番1号

電話 (022) 368-1141

印刷 今野印刷株式会社

仙台市若林区六丁の日西町2-10

電話 (022) 288-6123

---



